

東日本大震災シンポジウム

2024

いわて ボイス

「あの日から13年。
今だから語れること」





目次

目次	1
テーブル	4
共有の場	51
奥付	60



東日本大震災シンポジウム

第1回

いわてボイス

～あの日から13年。今だから語れること～

2024.3.30 sat
13:00-16:00

陸前高田グローバルキャンパス（たかたのゆめキャンパス）

（岩手県陸前高田市米崎町神田 107-10）

入場無料 定員 50名

※オンライン等による配信はございません。

参加お申込み

専用フォームからお申込みください。
（当日飛び入り参加も可）

<https://forms.gle/mdcV1kGbEtn5PTPB8>



テーブル1...モンティホール

災害情報を見直す～メディアを通じて

登壇者

鈴木 英里氏（株式会社東海新報社）
藤堂 光隆氏（株式会社岩手めんこいテレビ）
斎藤 孟氏（株式会社岩手日報社）
工藤 歩氏（岩手朝日テレビ宮古支局駐在カメラマン）
岩間 敬子氏（一般社団法人おらが大槌夢広場）

コーディネーター

坂口 奈央（岩手大学 地域防災研究センター）

テーブル2...講義室

支援する側に立った時、自分たちは何ができただのか

登壇者

江刺 由紀子氏（認定特定非営利活動法人おはなしころりん）
伊藤 昌子氏（特定非営利活動法人きらりんきっず）
伊藤 聡氏（三陸ひとつなぎ自然学校）
阿部 敬一氏（一般社団法人おらが大槌夢広場 初代代表）
早川 輝氏（特定非営利活動法人みやっこベース）

コーディネーター

葛巻 徹（特定非営利活動法人いわて連携復興センター）

いわて ボイス

東日本大震災から13年が経過しようとする昨今、あの日からの葛藤や苦悩、むなしさ、苦渋の決断への背景などが語られるようになってきた。この13年で、三陸の人びとを中心に経験してきた災害からの復興にまつわる出来事は、必ずしもきれいごとや思い出話でくくれるものではない。一方では時間の経過によって、地域ごと個性的な物事の決め方や苦悩、葛藤は、美談や物語化として回収されていく。東日本大震災は、広範囲にわたりまちが一変してしまう未曾有の災害で、手探りの中で復旧、復興が進められてきた。当時は混沌としていたこともあり、新たなまちづくり、地域再興のためのプロセスが検証されている事例も少なく、また検証は生活者に共有されているか、疑問である。

いわてボイスでは、「VOICE」=あの日からの日々における葛藤や苦悩、虚しさ、苦渋の決断など、今だから語れることを語り合い、共有しあう場をデザインする。これは、誰のため、何のための復興なのかを確認するためである。そして、同じ業種や団体、組織、活動を知り、探求しながらも、多様な人びとがとなり、他者の視点、考えや知見を学び、非常時につながる関係性を縦横無尽に交差させていく。

災害が発生するたびに、同じことを繰り返すのではなく、三陸の経験をいかすにはどうしたらよいか。いわてボイスを通じて東日本大震災からの日々を愚直に問い直し、災害に備えていく岩手を育てていきたい。

テーブル1

災害情報を見直す～メディアを通じて

発災（初動）から数年間に焦点を当て、当時の取材体制、取材内容、被災者に話を聞くことや、カメラを向けることなどについて、取材者と取材される側がともに語る場とする。住民に目を向けると、あの日あの時、マイクを向けられ拒んだ経験を後悔する人、今だから言えること、むしろ語りたいことがあるという声も聞かれる。取材者として心がけたことや、一方でいち個人としての葛藤、苦悩はあったのか。また災害情報という客観性、公平性に対する一定の担保を保持しつつも社会的に発信する意義についてどのように考えているのか…など、取材をする側・受ける側双方から当時を振り返る。

テーブル2

支援する側に立った時、自分たちは何ができたのか

東日本大震災を契機に、支援者となった人たちは、震災前、主婦・会社員・県内・県外にいた人など多様である。何がその人たちを支援者に駆り立てたのか。そして、何ができたのか。東日本大震災から13年が経過した今だからこそ話せることも含め、震災直後からのそれぞれの状況を主として初動にフォーカスして紐解いていく。話者からの当時の現状を伝え聞くことにより、いつどこで支援に回るかわからないすべての人たちに向けて、何かしらのメッセージを考えたい。

Table 1

災害情報を見直す～メディアを通して

2024.03.30

第1回 いわてボイス

テーブル1 「災害情報を見直す～メディアを通して」

登壇者：鈴木 英里 氏

(株式会社東海新報社)

藤堂 光隆 氏

(株式会社岩手めんこいテレビ)

斎藤 孟 氏

(株式会社岩手日報社)

工藤 歩 氏

(岩手朝日テレビ宮古支局駐在カメラマン)

岩間 敬子 氏

(一般社団法人おらが大槌夢広場)

コーディネーター：坂口 奈央 氏

(岩手大学 地域防災研究センター)

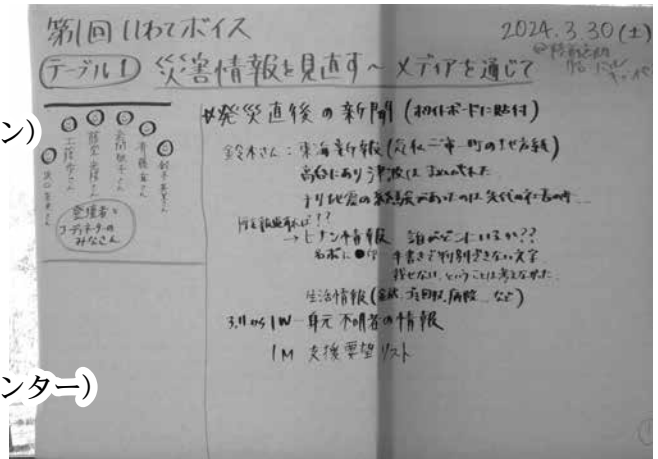


Table 2

支援する側に立った時、自分たちは何ができたのか

2024.03.30

第1回 いわてボイス

テーブル2 「支援する側に立った時、自分たちは何ができたのか」

登壇者：江刺由紀子 氏

(認定特定非営利活動法人おはなしころりん)

伊藤 昌子 氏

(特定非営利活動法人きらりんきつず)

伊藤 聡 氏

(さんつな)

阿部 敬一 氏

(一般社団法人おらが大槌夢広場 初代代表)

早川 輝 氏

(特定非営利活動法人みやっこベース)

コーディネーター：葛巻 徹 氏

(特定非営利活動法人いわて連携復興センター)

坂口 それでは、こちらのテーブルは「災害情報を見直す」というテーマで、メディア関係者、または取材されてきた方5名のお話を伺っていきます。

初めに、なぜこのテーブルを設定したのかというのを簡単に説明させていただきます。まず、私自身が元マスコミにいた人間だというのが最初の問題意識にあります。私はたった1年で、2012年春にはその報道関係を離れました。いろんな思うところがありました。一方で、報道という立場から離れたことで、報道の重要さであったり、一方で報道の至らない点など、いろんなことが気になるようになりました。災害における混沌とした状況の中で、自分自身に問いかけたり、葛藤しながら活動をされてきた一つが、メディアだと思っております。発災から10年以上が経過した今だからこそ語れることなどを、率直に皆さんにお話しただければと思っております。

葛巻 はい、それでは皆さま今日はよろしくお願ひいたします。周りの参加者の皆さまにもわかっているように進めていきたいと思っておりますけども、もし白熱して会場の皆さんを置き去りにしちゃったら本当すいません。本日はよろしくお願ひいたします。

まず最初に、皆さん、せつかくの機会なので、今日登壇した皆さまが普段どんな活動をしているかというところを皆さんに知っていただくから、お話に入っていきます。お座りいただいている椅子の方に各団体の皆さんの活動のパンフレットを置かせていただいていますし、あとこちらの会場前のプロジェクターを使って活動紹介をしていただきますので、どうぞよろしくお願ひいたします。はい、では北からということで。早川さんからお願ひいたします。

早川 はい、よろしくお願ひします。声が小さいのでマイクをいただきました(笑)。改めましてNPO法人みやっこベースの早川と申します、よろしくお願ひいたします。パンフレット、四

そして、こちらのホワイトボード、何か気になっている方も多と思います。これは今日、岩手日報と東海新報のお二人が登壇いただけるということで、よかったです。発災直後の記事をお持ちください、とお願いをしました。持ってきて1枚ぐらいだろうな、と思ったら、やっぱり見せたいという気持ちの強さは、メディアならではのですね。ちょっとお二人から、発災当時どんな取材をしたかについて、簡単に、こんな記事を取り上げましたっていうのをご紹介します。



角いこんなものをお配りいただいていると思います。それをご覧になっていただければと思います。私たちの団体は2013年の2月に設立しまして、ちょうど11年ぐらいが経過して12年目に入っているところです。ちょっと変遷はあるんですが、目的としては『宮古市で生まれ育つすべての子ども・若者の人生が豊かであること』ということ、一番大きな目的として掲げて活動しております。

その中で三つの領域で事業の整理をしております。一つは教育的なところですね。子どもたちがこの宮古市で生まれ、学ぶ、育つ、というところ。二つ目がキャリア支援・企業支援と書いてありますけども、若者が育って20代以降働くという領域に関するところ。三つ目はコミュニティとかまちづくり、その他の部分を含めて活動しております。メインとして、一番力をかけて行っているのが『教育的な事業』ということなので、ちょっと紹介したいと思います。

バラバラに写真を載っているんですが、主に子どもたちの居場所作りということで、小学生から高校生ぐらいまでが来れるようなフリース

Table 1

災害情報を見直すくメディアを通して

Table 2

支援する側に立った時、自分たちは何ができたのか

Table 1 ただいてもいいですか？では英里さんから。マイクはなくてもいいかな。

鈴木 はい。いいですか、もう始めて。まず東海新報をご存知ない方はいらっしゃいますか？あ、ご存知ないですね。この陸前高田と大船渡と住田町という二市一町で出している地域紙です。

陸前高田と大船渡が大きな被害に遭った、ただですね、私共の会社は高台にございましたので被災は逃れまして、震災の当日から新聞を刷ることができました。その震災当日の号外がまずこれです。この日はですね、輪転機がちょっとずれてしまって、自家発電機があったんですけど、輪転機が動かせなかったのでコピー機を使って、この A3 の号外をまず 2000 部刷って、各避難所に皆で分担して届けに行きました。

一方で、ほとんどの新聞販売店が低地部にあったので、ほとんど被災されてしまったんですね。

ペースを駅前の商店街に構えております。そこで子どもたちとコミュニケーションを取ったりとか、勉強したりとか、遊んだりしています。あとは体験活動ですね。小学生向けの自然体験の活動とか、農業体験のようなものとか、あとは「みやっこタウン」という、なんですかね・・・地域版のキッズニアみたいなイベントを行ったりしています。高校の授業にも関わらせていただいている部分もありまして、そこでキャリア教育的なことも、一部関わらせていただいております。あとは高校生の地域でのボランティア活動とか、マイプロジェクトとか、そういった地域で活動しながら学んで育っていくところの手助けもしているというところですね。

その背景というか課題感としては、日本の子どもたちの精神的な幸福度が低いというデータを見たりしております、それに加えてやっぱり『地方と都会の格差』、『機会格差』とか『体験格差』みたいなものもあるということを感じています。当初は、復興のために高校生の活動支援をして担い手になってもらえればいいな、

住田町以外。それでも新聞配達機能が完全に停止してしまったということで、翌日から小誌は、通常 8 ページだてなんですけど、翌日からは 4 ページだての新聞をしばらく刷りまして、それを個別配達ができないので、まず手分けしてまた同じように避難所に配って歩くということをしていました。

そして、その翌日の紙面なんですね。私達は地元の新聞社であり、なおかつ昭和 35 年のチリ地震津波も経験しています。けれども、あのチリ地震津波の記憶があるのは、当時子供で、今 60 代の社長しかいなかったんですよ。だからその災害報道って一体何をしたらいいかって全くわからない状態でした。何からやったらいいんだろう。けどどまずやっぱり言えるのは、私達も地元住民であるということです。私達が今知りたいことって何だろうって考えた時に、一番必要だと思ったのが、この避難者情報でした。

誰がどこに逃げているのか。これはやっぱり発というところを考えていたんですけども、地域とか復興よりも、子どもたち一人一人の人生の豊かさということが一番に掲げて活動していこう、ということにこの 2、3 年ぐらいですね、考え直して、震災から 10 年ぐらいの年でもありましたし、ビジョン・ミッション・理念を捉え直して、活動しているというところになっております。

あと宮古って、まあ他の地域もちょっと似ているところもあるかと思いますが、海と山で物理的に閉鎖されているというか、人の流動性も少ないし、大学がないので若い人たちが出て行ってしまいうんですね。いろんな人と出会う機会として大学生っていう存在を子どもたちが知るといいう機会も少ないです。そういう多様な人と触れ合い、出会いが生まれる機会が多くないのかな、ということで、さっき言ったような活動を自主的にやっております。豊かな人生を過ごすごく抽象的な言葉ですけども、うちの団体的に考えると、『望む未来を自ら創ることができる状態』に子どもたち、若者たちになってほしいなと思っています。今が充実していくような時

Table 2

ペースを駅前の商店街に構えております。そこで子どもたちとコミュニケーションを取ったりとか、勉強したりとか、遊んだりしています。あとは体験活動ですね。小学生向けの自然体験の活動とか、農業体験のようなものとか、あとは「みやっこタウン」という、なんですかね・・・地域版のキッズニアみたいなイベントを行ったりしています。高校の授業にも関わらせていただいている部分もありまして、そこでキャリア教育的なことも、一部関わらせていただいております。あとは高校生の地域でのボランティア活動とか、マイプロジェクトとか、そういった地域で活動しながら学んで育っていくところの手助けもしているというところですね。

その背景というか課題感としては、日本の子どもたちの精神的な幸福度が低いというデータを見たりしております、それに加えてやっぱり『地方と都会の格差』、『機会格差』とか『体験格差』みたいなものもあるということを感じています。当初は、復興のために高校生の活動支援をして担い手になってもらえればいいな、

災の時刻が午後2時46分ということで、それぞれが会社にいる、勤め先にいる、あるいは子供たちは学校にいるような時間帯です。そうすると同じ家族であっても、どこに逃げたかがわからないんですよね。もちろん電話も通じない、ネットもありません、となった時に、誰がどこに逃げているんだらうってことをまず知りたいはずだと思ったわけです。なので、もうこの翌日13日から、毎日4ページ中の2ページを使って各避難者の情報を掲載しました。それも200ヶ所ぐらいある避難所を一軒一軒回って、そこで避難者名簿というのが配付されるんですね、こんな感じで。誰がここに逃げています、というのが手書きで書いてあるわけです。それを写真に撮って、会社に戻ってプリントアウトして、全部打ち込んでいくっていう作業をずっとしてたんですよ。

そうすると、ちょっと困ったことが起きる。ちょっと見えづらいんですけど、後でよかった
~~~~~  
間とその先の未来に向かって希望を持って生きてほしいということで、選択肢を増やすとか、意思をもって未来を切り開く力を身に付けてもらうということを小学生や高校生にいろんな機会を提供していきたいと思っています。パンフレットと、SNSとかNOTEとかで詳しくその状況がわかりますので是非ご覧いただければと思います。

**葛巻** 早川さん、ちなみに出身地と、なぜ今宮古にいるのかだけちょっと簡単にご紹介いただけますか。

**早川** すみません、自己紹介を忘れてました。早川輝と申します。今37歳です。出身は福岡県北九州市でして、大学まで福岡県内で、2年間オーストラリアにワーキングホリデーに行きました。帰国したのが2011年3月1日ですね。それで東京に降り立って、東京の友達の家に行っている時に、震災を経験しまして。ちょうど就活前だったので時間があって、自分に何かできることがないかな、と思ってボランティアを探

らご覧になってください。名簿のところには黒丸があるんですね、よく見ると。名前の合間合間に黒丸がある。これは何かというと、手書きの名簿だと判別できない文字が出てくるんです。写真を撮ってプリントして拡大しても読めない。その読めない文字をどうするかってなった時に、載せないっていう考えはなかった。とにかくそこにいる人全部載せよう、と。もしかしたらその前後に、避難している人の名前で、家族とかだったら「これはあの人だ」って、推察ができるかもしれない。推測ができるかもしれない。ということで、わかんない字もわかんない字なりに全部載せましょう、ということで黒丸になってるんです。よくよく見るとやっぱり、結構中国人の方のお名前が多い。中国人の方のお名前って漢字が日本と違ったりするんですよね。やっぱりその水産研修生が多い地域ってこともあって、そういう方もたくさんいたわけです。だから、そういうわかんない字を全部黒丸にして載せて

して、宮古市の災害ボランティアセンターの県外個人ボランティアの受け入れが早い方だったので、個人で来てみました。葛巻さんとかとお会いしたりしながら、気づけば13年経って、当時24歳だったんですが、年を取っているという感じですね。

**葛巻** もうご結婚されてる？

**早川** そうですね。結婚して、3歳と1歳の息子が2人います。私の体重も当時から15キロぐらい増えました（笑）。今日はよろしくお願ひします。

**葛巻** はい、よろしくお願ひします。次に、阿部さんお願ひします。

**阿部** 改めまして、大槌町から参りました、元一般社団法人おらが大槌夢広場の阿部と申します。よろしくお願ひします。私もうこの社団法人離れて10年ぐらい経っているので、今の活動は、細かくはホームページの方で見れば

Table 1

災害情報を見直す  
メデイアを通して

Table 2

支援する側に立った時、  
自分たちは何ができたのか



Table 1 いるって感じです。

災害情報を見直す  
くメディアを通して

もうとにかく、何をやらいいかっていうのは、手探りだったんだなっていうのを振り返っていて思うのが、これが3月15日ですね、震災4日目の新聞なんですけど、ここで初めて、題字の下にですね、「この東海新報を安否情報とか伝言メモにお使いください」というお知らせが出てくるんです。それまでは本当に何をしたいかわかんないんですけど、作っていく中で何か伝言メモみたいな役割を果たせたらいいよねって話が出てきたわけです。それぞれが、駅の伝言板と一緒にですね。私はここに避難しています、あなたはどこにいますか？みたいなことを寄せてください、それを紙面を使って掲載しますっていうことをここで初めて呼びかけ始めた。あとは、新聞が配達できない分、避難所に行けば見られますよ、あと、うちの会社に来てもらえれば差し上げますっていう形でのお知らせをようやくここで入れ始めてるんです。

Table 2 と思うんですけども。私は今56歳で、阪神・淡路大震災を大阪で経験しています。それでUターンして、岩手で東日本大震災を経験して…。だからその阪神から来ての東日本の流れがやっぱりこの活動の原点で、いろんな活動を始めました。

支援する側  
に立った時、  
自分たちは  
何ができたのか

震災直後から炊き出しボランティアを避難所で始めて、あとはいろいろ…何だろう、課題を見つけていろいろやっていく中で、いろんな方との出会いがあって、社団法人は2011年11月に立ち上げて、その前段階で、まあ実行委員



その翌日の新聞って、もうダーッと本文が流れてて、すごい見づらいんですね。とにかく集まった情報を全部入れちゃえて感じて入れてるんですけど、この日からは陸前高田と大船渡に分けて入れるようになってます。

だんだん、あと何が必要だろうっていう話になってきて、この日からやっぱり生活情報っていうのが入り始めました。生活情報、要はですね、ライフラインの復旧はいつ始まるの？水道はどこで、どこに行けば水が出るの？ゴミ収集っていつしてくれるの？ってというような情報。あとは金融機関の情報、病院はどこがやっているか、それからこの店に行けば何時から何時まで1人3品まで買えます、というような本当に生活に密着した情報を社員全部で手分けして、その時もガソリンもないので自転車で行ったり歩いて行ったりです。それをかき集めて載せるようになりました。

3月19日の震災発災から1週間の紙面なん  
会みたいな形で町内の地元で被災して仕事を無くしたり、家を無くした若者たちが集まって、これから何ができるかっていうのを考える会議を8月ごろから始めました。そのきっかけとなったのが広告代理店の方とか盛岡の経営者の方とか岩手大学の方であったりとか、まあいろいろな方のサポートみたいな、初めは復興マネーに近寄ってきた？とか、ちょっと疑心暗鬼のところがあったんですけども、地元が落ち込んでるところに元気とか仕事を増やす、新たな仕事を生み出すとかそういう目的で社団法人立ち上げました。

現在はそれからいろんな、事業ができ、だんだんだんだん整理されていって、ツーリズムとか企業研修的なものを受け入れる団体になっています。

当時はもう全部本当に手作りでやって、そして「おらが大槌復興食堂」というのを立ち上げた時に、箱が一応でかかったので、いろんなボランティアの方とか、あとは様々なコンサルだとかいろんな方がそこに集まって交流して、何か復興の支援のヒントを得ようと集まってる方

ですけど、ここから身元不明者情報っていうのが入ってくるようになりました。1週間で。まず最初は、誰がどこに逃げているかが必要とされた。だけどやっぱり時間が経てば経つほど、あの人がまだ帰ってこない、どこにも情報がない、っていう人がどんどん増えてくるわけですよ。安置所に安置されているご遺体が身につけていたものを詳しく書いて、こういう方がいらっしゃいますっていうのを出すようになったんです。その当時、遺体の安置所って何ヶ所かに分かれているんですけど、一ヶ所一ヶ所が遠いんですよ。だけど、ご家族が未だどこにいるかわからないって方は、そういうところを歩いて回られてたんです、車がないから。もしくは乗り合わせで。それってすごい大変なんですよ。だから、こういう身元不明者の情報っていうのを、この日から毎日載せるようになっていきました。あとは、火事場泥棒が頻発したっていう話もここに出ています。これは私が書いた

の交流があって、それとあとは復興まちづくりというところを本当に地元の人たちがどうしていったらいいか、という会議だとかいろんなことに活用されたのが復興食堂です。そこからツーリズムが生まれて、そして、町の指定管理を受けたり、雇用を生みながら続けていたっていうのがおらが大槌夢広場です。まあ後はいろんなそこで起こった想いというのは後ほどお話出来ればと思います。

これがその地域づくり総理大臣賞をいただいた、2012年かな？いただいた時の写真ですけども、本当に、大槌町はご存じの通り町長をはじめ幹部職員の多くが亡くなって役場の機能がストップした時に、そこをサポートするっていうことで役場に事業計画を出して、一般社団法人を立ち上げて、本当に役場のサポート的な事業をやっていたという。後々、大槌町にまちづくり会社ができただんですけども、それ以前にそういう風な団体として、おらが大槌夢広場はやっておりました。

**葛巻** この写真って何年ぐらいの時のですか？

んですけど、後で失敗談としてもう一回紹介したいと思います。

それから、これは4月5日の紙面です。1ヶ月ぐらいですね。4月5日になってくると、今度は避難者情報よりも遥かに身元不明者情報の方が、紙面の大きなスペースを割くようになっていきました。それだけ多くの方たちが発見されて、安置所に安置されてっていう風になってきてるんですね。だから、生きてる人の情報などは、人伝えにもだんだんわかってくるようになったんだけど、今度はこっちの方が紙面のスペースが大きくなっていったっていう感じです。

これも震災後1ヶ月ですね、4月10日の記事なんですけど、これも後で私が失敗だったなと思うことで紹介したいと思うんですが、各避難所のこれが欲しいっていう支援要望リストを作ったんです。やっぱりこれも手分けして、全避難所を歩いて、今ここは何が足りていません、こういうことが必要ですっていうような情報を

**阿部** これは2012年に賞をいただいた時にみんなで記念写真を撮ったものです。初めは、これ（おらが大槌復興食堂）はプレハブでトラステントっていう大きなイベント用のテントで食堂を始めたんですけども、夏を迎えるのにもう暑過ぎて、これはダメだってことで、急遽プレハブに入れ替えて、エアコンも入れて、快適な食堂をすることになりました。

**葛巻** 写真の真ん中にいる方が、今日の分科会のテーブル1に登壇されている岩間さんですね。

**阿部** ああそうですね。いや、彼女こっちのテーブル2なんじゃないかと思ったんですけど。いまでも現役でおらがの理事もやっていますね。でも、彼女はテーブル1で昔話をしてくれていると思います。はい、よろしくお願いします。

**葛巻** はい、ありがとうございます。じゃあ伊藤（聡）さん、お願いします。

Table 1

災害情報を見直すメデイアを通して

Table 2

支援する側に立った時、自分たちは何ができたのか

Table 1 集めて、それをリストにしたっていうものでした。それぞれの避難所で足りてるもの・足りてないものが偏っている。あとは避難所にいる人数が全然違うので、それぞれ求めているものが違ったんですよね。だからこれはリストにしなきゃいけないんじゃないかと思ってリストにしたものが1ヶ月後の紙面に載っています。ちょっとこれについてはまた後で詳しく説明させていただきます。すいません長くなりました。

災害情報を見直すくメディアを通して



坂口 では斎藤さん、お願いします。

斎藤 はい。岩手日報の斎藤です、よろしくお願いします。私は陸前高田支局に2011年の発災直後から高田取材をしまして、その後、2015年の3月までいたので4年間、勤務しました。(いわてボイスの会場になっている)前の米崎中学校には仮設住宅があって、当時は気づかなかったけど今はここから海が見えるんだなって。

Table 2

支援する側に立った時、自分たちは何ができたのか



伊藤(聡) 伊藤です、よろしくお願いします。自分は岩手県の釜石市から来てまして、生まれも育ちも釜石でございます。今は『さんつな』っていう名前にしてありますが、当時は『一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校』っていう団体で活動してまして、この団体を立ち上げたのが2012年の4月です。東日本大震災が起きた翌年に立ち上げました。実は活動自体は震災直後からやっていて、いわゆる自分も一被災者です。住まいはだいたい釜石大観音の辺りと言えればわかってくれる方は多いと思います。そこら辺に

住んでいて、家も全壊してしまって、家族はたまたま全員助かってます。当時、宝来館という、あのキャラの濃い女将が経営している旅館で働いていたこともあって、目の前で津波を経験しました。次のスライドにまさに津波が襲来した画像があるんですけど、これを撮影しながら逃げきったっていう、これが一番わかりやすい状態かな、という感じです。これを受けて、自分も一被災者ではあるんですけども、地元を取り戻すということを何かやらなきゃなと思い、実はボランティアコーディネートを翌月から2011年4月からやり始めて、そこからいろいろ釜石のまちづくりに関わらせてもらってきたというような人間です。

今は何をやっているかっていうと、いろいろ紆余曲折を経て、次世代育成という、いわゆる校外活動であったりとか、社会教育とか、そういうキーワードで、小学生から高校生くらいの世代が、学校外で充実した時間を過ごせる活動等をやっています。活動のテーマは、今は防災と震災伝承に振り切って、テーマを絞ってやらせてもらっています。活動の中で、何個かピックアップ

今日は盛岡から来ましたけども、やっぱり盛岡から来ると、竹駒のあたりでここから先へは瓦礫で行けなかったよなっていうポイントは大体覚えてるんですね。発災直後はみんな一中に避難してて、そこに車を置いて歩いて瓦礫の山になってるところを降りて行って取材を始めたんですけども、ご遺体はかなりあって、その遺体の場所に運び出せないところには赤い旗が立ってるっていうところを書いたのがこの3月15日の新聞かな。この時も、奥に見えるのが昔の高田高校ですね。自衛隊の方々が搜索してるっていうところでしたね。本当に目に見た光景ってのは、赤い旗がばあっとこうなって、最初何だろうと思って取材をしてたけど、そうか、これだけまだ収容されてないご遺体があるんだなっていう状況でした。

13年経って思うのは、そういう覚えていることと、あと今回このいわてボイスに参加するにあたって、かなり忘れてることが多くて、私  
~~~~~  
ブして来ました。一つは「防災教育」として、釜石高校で授業を持たせてもらっています。『探究学習』は各高校でもやっていると思うんですけど、釜石高校はゼミ形式になっていて、自分の興味でゼミを選べます。国際交流とか教育とかですね。自分は防災ゼミを担当させてもらっています。一番人気がないんですけども、人気ないが故に、少ない人数でゼミ生にいろいろ地域でやらせてもらって、大学でやっているものの縮小バージョンっていうのをゼミでやったりとかしています。あと震災伝承では自分でも語り部をやったりしますし、三陸鉄道は震災学習列車のほうで、うちの団体以外の震災学習で来られる地域外の人たちの受け入れなどもしています。あとは、これは子ども向けにサバイバルゲームをしたりとか、あと火起こし体験などやったりしています。

今日は、自分の団体のパンフレットがないので、『夢団～未来へつなげる ONE TEAM～』っていう三つ折りのチラシを持ってきました。釜石高校でいろいろ探求だったりとかマイプロみたいなことをやっていたら、とある高校生が震

身も、改めてどんな取材をしたんだろうとか、どういう思いで取材したんだろう、というのを振り返るいい機会になった。やっぱり会社員なので、人事異動があつてですね、離れた後はなかなか足を運びたくても来られないこともあったり、離れてしまうとどう付き合っているのか、どう向き合っていくかという時期もあり、当時のことを振り返ってみるいい機会になったなと思って、今日はそういう思いで参加しました。よろしくお願いします。



~~~~~  
災を伝えるとか防災をやっていくような団体を作りたい、ということでできたのがこの『夢団～未来へつなげる ONE TEAM～』っていう団体です。今ちょうど5年目の活動に入ったところなんで、最近ありがたいことにメディアとかに取り上げていただいたんです。震災の記憶がなかったりとか、ギリギリ記憶があるっていうような、そういう世代の子たちが震災伝承を理解していくことも、自分としては今ある日常の大切さを再認識しながら、そこで同じような思いがある方々と協力して関わって、震災の伝承をおこなえるようにというのを主にやっております。そういう活動を通して、一時期は釜石にいかにして関係人口を増やすとか、移住定住とか色々やってました。でももう今は振り切つて、まあみんな育つて出て行けつてというような、そんな場にしていきたいと思って、各地で活躍している人がいます。振り返ってみるとみんな三陸から人材が輩出されていますね。そうってくれたらすごく嬉しいと思いながら活動しております。以上です。

Table 1

災害情報を見直す  
メディアを通して

Table 2

支援する側に立つた時、  
自分たちは何ができたのか

Table 1 坂口 ありがとうございます。英里さんは、ある意味三陸の半当事者でもあるわけで、一方で取材をしてきたというお立場で、斎藤さんはある意味、外者的な視点で三陸、特に高田を中心にその変化を見続けてきた人になります。

そういった意味で言うと、斎藤さんと同じ枠に入るのがめんこいテレビの藤堂さんになります。藤堂さんは発災の1年前まで営業畑に居て、そこからポーンと報道に異動になって、右も左もわからない中、被災地の取材が始まり、しかも2011年には特別番組も何本か手がけるということで無茶ぶりを会社から強いられた1人です。

ある意味その外者から見た、特に高田とか大船渡辺りに入っていたと思います。当時を振り返ってみてどんな風に思っていたか聞かせてください。



藤堂 すいません、座って失礼します。めんこいテレビの藤堂と申します。今紹介ありましたけれども、2010年ですね、震災がある半年前に辞令があって、それまでは東京支社というところで営業マン、テレビ局の営業って何やるんだって思うかもしれませんが、いわゆるコマースシャルとかをセールスする仕事をして、電通とか博報堂とかそういうところを回ってました。全く報道というセクションに来るとは思わなかったんですけど、報道という取材によく慣れてます。20年前に比べて、3分の1の人口が消えました。担い手は見つけにくく、人材不足の声があがります。高齢者はどんどん年をとって活動できなくなる。そんな大船渡であります。

『子ども時代はどの子も幸せでなくてはなりません。本は子どもを幸せにする一つの手立てなのです。』これはイギリスの児童図書館の方の言葉なんですけど、私たちもこのように思っています、たくさんのお楽しみがある中での読書もそのお楽しみのひとつとしてあって、それが子どもの心の成長など豊かな人間形成につながると願って活動をしています。

震災の後は、NPO法人というところの仮設に行っても評判が良いとは言えず、法人化するのをちょっと置きました。2016年に法人化し、そして昨年は認定NPO法人となったところでございます。活動は読書推進や市民交流、そして対象は高齢者か子ども、というところが多いですけども、目標は大きく一つ、良い地域になるように、ということなんですけど、地域の人たちの声を聞きながら様々な事業を立ち上げているところです。

Table 2 葛巻 ありがとうございます。はい、じゃあ江刺さんよろしくお願ひします。

江刺 はい、皆さん自己紹介されているので、投影資料には入れてなかったんですけど私も自己紹介いたします。大船渡で育ったんですけどけれども、20代半ばくらいからちょっと日本を出たくなってですね、そのまま出てしまって40代初めまでの16年間、海外で過ごしておりました。そのうち12年間はインドにおりまして、ラストの何年かはインドにおいてボランティア活動などをしていました。マザーテレサの感染症の収容施設であるとか、孤児院であるとか、屋外にある子どもの青空教室など、いろんなところを支援しました。そして、2003年4月に大船渡にUターンして、「読書ボランティアおはなしこりん」を立ち上げました。パートなどしながら余った時間で何かしたいというおばちゃんたちの集まりです。ちょうど20年前です。

大船渡も人口減少が進んでいまして、資料を見ていただければと思います。この3ヶ月間、1ヵ月に66人ずつ、世帯数も19世帯ずつ減ってい

きた半年後にですね、この東日本大震災が起りまして、そこからもう腹をくくって、今に至るところです。

テレビ局のいわゆる記者という仕事をしていてですね、当時、めんこいテレビには記者と呼ばれる人間が何と3人しかいませんでした。専属の記者っていうのは3人ですけども、アナウンサーを兼務して記者をやっています。坂口先輩もそうなんですけど、アナウンサーが記者として、まあそれでも7人とかですかね。それぐらいですね。到底うちのマンパワーでは全てのエリアをカバーできない。さらにカメラがないと取材ができない、カメラの台数も限りがあります。当時は、うちの本社にあったカメラは5台かな。5ヶ所しか行けないんですよ。じゃあそこをどうやって乗り切ったかっていうとですね、我々フジテレビ系列の系列局という、いわゆる兄弟というか仲間に力を借りました。フジテレビもそうですし、お隣の秋田県からは秋田

この写真は移動こども図書館で、2011年5月から続けています。小学校に学級文庫として本を届けています。また、陸前高田と大船渡の子育て支援団体に訪問し、読み聞かせと図書貸出もしています。

地域を巡回して、高台移転した方々や公営住宅団地などに行き、本を貸し出したりお茶っこをしています。

また、おばちゃんおじちゃん、いろんな人たちを集めて交流会をしています。彼らが仮設に居た時には仮設で、また高台に移転したら高台移転の集会所、また地域に溶け込んだならばその公民館という感じで、皆さんが移っていくところを追いかけるようにして、交流事業を続けています。

そうすると、住民さんたちも何かやりたいって気持ちがふくらんできて、右上の写真、フィリピンの台風の時にですね、『おらも助けてもらったから、テレビとか見でつとあの時を思い出す。何かできないだろうかと思ってお金持って来たんだけど預けるところがない。』っていう言葉から始まって、では受け皿になりましよう

テレビの方が来ましたし。福島と宮城は同じように被災してましたので、そこはあれですけども、全国、遠くは沖縄から北海道まで、いろんな人の力を借りて報道をしました。今日ご参加いただいているこの方々のところにも取材に行かせていただいて、本当にお世話になりました。

なので、我々ローカル局と言われる地元のテレビ局の使命というか、そこが13年、どういう風にしてこの震災報道を続けていったかみたいな、どっちかというところをちょっと話できればな、と思っております。

**坂口** 一方で宮古の住民でありながら、顔見知りの人たちの苦悩とか、あと、まさに津波を撮影しなければいけないという立場にあった時の葛藤など、発災当時の撮影をするというカメラマンとしての使命とかがあったと思うんですけど、一方でいろんな葛藤をしながらカメラを向

ということで、行ってお手伝いはできないけど、支えたいという気持ちを大事にして募金活動を展開しています。星印が付いているところは実際に私が行って、その場所の様子をじっくり見てですね、戻って来て募金活動をした人たちにお伝えする。こういう風な一方方向じゃない感じにしたいと思っています。2024年の能登半島にも行って参りました。

その他、市民が主役。活躍できる場を提供して、市民一人一人が元気になっていただきたいと思っておりますので、高校生が読み聞かせしたいとなれば高校生にやらせよう、聞き手の中にも高校生が子どものお世話をすると。また、高齢者の人たちも、絵本を読む練習など楽しくしつつ、私たちではなく住民さんに絵本を読み聞かせしていただくという、皆さんに…何て言うんでしょう、『生き残ってしまった〜』っていう風におっしゃるので、『いえいえ、今からだって何でもできる。』っていうところを実践する。そして役立った事を感じていただく、っていうところが活動の中心にあります。

一年に一つ、地元の民謡を題材に紙芝居を作っ

Table 1

災害情報を見直すメデイアを通して

Table 2

支援する側に立った時、自分たちは何ができたのか

Table 1 けていたというお話がありました。ちょっとその辺を聞かせてください。

災害情報を見直す  
くメディアを通して

**工藤** はい。改めて宮古市で映像制作会社をやっているハニカムというところの工藤と申します。よろしく申し上げます。チラシの方には岩手朝日テレビという風を書いてありますけれども、元々はですね、岩手朝日テレビが今年 29 年になるのかな、来年 30 年になると思うんですけど、その前ですね、朝日テレビ岩手支社みたいな時代から、実は朝日系列のテレビ局と関わりがありまして、地元ではお遊戯会とか結婚式とか、当時はビデオテープでしたけど、そういうビデオ映像ソフトを作る会社に勤めていたんですね。7、8 年ぐらい前にその会社の代表がご逝去されたので、私が自分で会社を立ち上げて、今息子と 2 人で会社をやっています。なので、今日は私が来ちゃったので、社員の半分がここに来たということなんです。



岩手朝日テレビの宮古駐在っていう契約で、発生物とか季節物とかですね、沿岸、南は山田町で北は田野畑村、西の方に川井と岩泉ですね。その辺りが私の範囲なんですけれども、大体月に 20 本ぐらいのニュースを取材しています。

津波注意報とか警報が出ますと、当時はですよ、水門を閉める様子を取らなきゃ沿岸のカメラマンではないぐらいの感じで、もう砂糖に群がる蟻の如くですね、各社のテレビカメラが水門のところに行くっていう習性だったんですね。

Table 2 っていますが、中学生だったり高校生、また子育て中のお母さんや高齢の男性に、絵を描いていただいております。そしてこれをあちこちで披露しています。

支援する側  
に立った時、  
自分たちは  
何ができたのか

また、小中高校生、毎年 240 人から 300 人の子どもたちに絵本づくりのボランティア活動に参加してもらっています。日本の絵本に、海外の送り先の現地の言葉のシールを貼るという活動です。毎年送っていますけれども、送るだけじゃなく、私もミャンマーの難民キャンプとか、カンボジアのスラムなんですけどそこに行ってますね、いかに子どもたちが喜んでいたか、これをレポートして、帰ってきて、大船渡の子どもたちにフィードバックしています。「役に立てた」という実感によって、子どもたちは次の社会貢献アクションに出やすくなります。これはミャンマーの難民キャンプですね。このような流れで今のところきております。コロナ禍でもできることを模索しながら続けているところです。

防災ワークショップは、震災後に生まれた小学生を対象に、大船渡の 11 カ所の小学校のうち、去年は 8 校実施しています。座学をしつつ、小

学校低学年から楽しみを入れながらということで、1、2 年生には非常持ち出し袋の中身を考える神経衰弱ゲーム、3、4 年生には地震が起きた時にはどうするのかを防災すごろくで遊びながら学んでもらいます。5、6 年生には震災で小学校が避難所になった場合、何をすることができるのか、何が必要なのか、っていうような事を巨大パズルにしてみんなで組み立てながら楽しく学んでいます。また、避難所では防災マットにこのようにして寝るんだよと実際に寝てみる体験をしています。

その他ですね、岩手県教育委員会では小学校 1 年生から高校 3 年生まで復興教育プログラムというものをやっているんですけど、小学校 1 年生になる前の導入部分として、未就学児用の絵本を作っております。『いきる』、『かかわる』、『そなえる』をテーマに一年に一つずつ作っております。今年度は『そなえる』でこの本を作りました。これは実際に子どもたちの前で読んだりして、岩手県教育委員会の方向性に、民間の私たちも足並みを揃えています。ということで、私たちは『本で人と人、人と街をつなぐ』この

今はどこの局も水門の近くに行っちゃ駄目です。行って撮ったところで使えないのでっていうことになって、行くんじゃない、と。まずは命を守ってくださいね、という風になりました。これはあの津波があったからですね。いかに危険なことをしていたのか。長年、長い間津波が来てなかったのを忘れていたというか、ちょっと思い違いをしていたんでしょうね。日本中のテレビ局で津波注意報が出たら水門を撮るのが当たり前っていう時代だったんだと思います。

震災の2日前ぐらいにも大津波警報が出たときも実際、水門を閉めるところを撮ったりして、やっぱり津波来なかったねと。あの時…60センチ？1メートルの警報だったかと思いますが、実際は何十センチか来た程度で、これが津波というものか、ぐらいの感じだったんです。沿岸カメラマンとしてはまあ仕事はできた。水門を閉めるというのを記録する仕事はきちんと行うことができました。良いか悪いかは置いておきます。ありがとうございます。

**葛巻** はい。江刺さん、ありがとうございます。江刺さんは大船渡にUターンしてきたということですね？

**江刺** そうです。Uターン組です。

**葛巻** はい。では最後、伊藤（昌）さんお願いします。

**伊藤（昌）** はい。江刺さんがすごい立派な発表だったので…ちょっと私3分って感じで簡単なんです。先ほどもご紹介いただいた通り、生まれも育ちも陸前高田市です。同じ市内に嫁いだんですけれども、初めて同居というのを経験しまして、こんなに子育てって大変なんだっていうことを感じました。こちらにきりりんきつずのパンフレットがございますが、第一子連れながら子育て支援ボランティアっていう、まあサークルですね。サークルからまず始めました。

といてですね。

来る3月11日なんですけれども、息子が大学進学を控えて、そのスーツを用意しなきゃいけないんで、紳士服屋さんに行ってスーツを買おうかな、ということで半ドンですね、半ドンっていうのは死語ですね。午後から休みをもらって行ってるところで、何かやたら揺れるなって、電線がビヨンビヨンして、これ地震かと思って、これがやっぱりその砂糖の蟻じゃないですけども、息子のスーツはどこへやらで、もう、すぐ水門に行かなきゃっていう。いくら午後休みをもらっていても、もうカメラを持っているので水門に向かうわけなんです。ところが、途中信号も停電で停まっていますし、道路は大渋滞、目指すところは宮古市役所のさらに…宮古の辺りをご存知の方は思い描いていただきたいんですが、旧宮古市役所から浄土ヶ浜に向かっていくところ、ちょっと高く超えなきゃいけないところがあって、そこが漁協のビルです。通

その中で託児をしてもらいながら、市の乳幼児学級に入った時に、1時間でも2時間でも自分の子どもと離れて過ごすっていうことのごく有難さと、子どもを見ていただいていたお姉さま方っていうのが、子育てがすごい上手だったんですね。それで、子育てのヒントが得られたり、助けてもらえたり、わが子の良さに気づけたりして居場所って大切なんだなあと感じました。子育て支援ボランティアっていうのをそこで初めて知りました。大船渡の合同庁舎の中でちょうどやっていた子育て支援ボランティア養成講座っていうのを受講しながらだんだん入っていったっていう感じですね。だから私も、江刺さんほどではないんですけど、私も子育て支援という部分では長く関わっております。

で、だんだんに自分たちで活動を始めてやっていくうちに、陸前高田の駅通りがすごくシャッター街になっていったので、土日をごで過しますか？っていうアンケートを取った時に、やっぱり盛岡に遊びに行くっていうそういうアンケート回答がすごく多かったんですね。それでこれじゃダメなんじゃないかなと思って、駅



Table 1 称漁協ビル。漁業協同組合宮古何とかビルっていうビルなんですけど、そこはですねIBCもめんこいテレビもそこから撮ってるのかな？その水門が大きくて見栄えがいいんですよ、映像的に。水門を閉める映像が派手なもんですからね。そこに向かうわけなんですけれども、大渋滞で車が進まなかったの、やむを得ず旧市役所に車を停めて、カメラだけ持ってそこから歩いて、1キロぐらい・・・1キロ弱ぐらいだと思います、旧宮古市役所から漁協ビルまでは。そこをカメラ持って行ってる時に、旧宮古市役所の庁舎の上の方から「工藤くん行くな！津波が来るぞ！」って言われて、それがね、宮古市長。応援団だったので、声の人より通るんですね。他の人も、後から聞いたらみんなで呼んでたらしいんですけど、声が届いたのが今の山本市長の声だけだったんで。無視して行くと後から「お前無視して行ったっけもんな〜。」って冷やかされるのわかってたんで、じゃあもう水門諦める

災害情報を見直す  
くメディアを通して

か、と踵を返して市役所庁舎に上がって、なんかすごい堤防を超える黒い津波、大型漁船がこう堤防を越えて来たりとか、橋にぶつかったりする映像を撮ることになったんですね。あの市役所から漁協ビルまでを7分間で行けたかどうかは、多分無理だったと思うので、市長が応援団出身じゃなかったら俺死んでただろうな、と思うんですよ。だから命の恩人なんですよ、市長は。

それで市役所の前の堤防の黒い津波を撮って、一晩市役所で夜を明かすんですね。ところがビデオカメラなんてバッテリーとメディアがいっぱいになっちゃうと、ただの重しにしかならないので、事務所に換えのバッテリーとメディアを取りに行きたいなと思って、ちょっと行ってくるねなんて、もう日没になってるんですけど、そう言ったところ、市役所の職員さんたちからも止められて、出してやるわけにはいかん、と。津波がさらに第何波が来るかわかんないんだか

Table 2 通りに洋品店をリフォームして、最初、普通の主婦4人だけで始めました。そうしているうちに7ヶ月ぐらい経って、東日本大震災が起これ、駅通りのその活動の場所もスタッフも全員被災しました

支援する側に立った時、自分たちは何ができたのか

それで、ますます産み育てやすい街を作らなくちゃいけないんじゃないかと思って、流されちゃって二度とダメだと思ったんだけど、こんな時だからこそと思って、被災して、4月には一中（陸前高田市立高田第一中学校）の図書室を借りて再開したんですよ。こんな時だから本当に産み育てやすい街を作りたい、と思いましたね。2013年に私たちは、何でNPOにしたかと言うと、それまで任意団体だったんですけど、やっぱりいろんな方々と信頼関係を築きながら手を繋がないと子育てしやすい街を作っていくかと思ったんで、NPO法人を立ち上げました。目指す目標としましては、やはり『郷土を愛する子どもたちの健全育成』ですね。ここで育った子どもたちが郷土に誇りを持って、被災したけど、ここに住んでよかったと思ってもらえるような、そんな活動をしていきたいな

と思いました。  
子育てはやはり家庭だけでできるものではないので、やはり子育て広場を通じていろんな人と、団体と、地域と、それが本当に元気な子どもたち、親を育むことで復興の未来の先に繋げていきたいなと思って、『繋がる、産む、育む』という三本柱を立ち上げました。人との出会い、交流を広げていって、地域・世代を越えてお互いに支え合う。パパもママも当事者意識を持ってもらって、お互い様という感情を通して学んでいくと、やっぱりいろんな体験を通してお父さんもお母さんも育てて行ってほしいな、と思って様々な活動をしています。

主軸は『おやこの広場きらりんきっず』っていうものなんですけど、地域に出向いた「お出かけきらりん」という企画で米崎町というところに行ったりとか、アバッセっていう商業施設が中心地にあるんですけど、そのパブリックスペースに月一回お出かけしたりしています。子ども向けのイベントなんですけども、その他にも地域の人も気軽に参加する夏祭りだったり、

ら、と。朝、陽が昇って、見てわかったのはとても行けた状態じゃなかったですね。腰まであるヘドロだったりとかだったんで、結局、実際に行っても無理だったんでしょうけど。

私は生まれも育ちも宮古市なので、故郷が壊れていく様子を撮ってしまったっていうことの、それって家族が殴られてるところを黙って撮ってたっていうものだなんて思っていましたね、本当に。そんなものを撮っていいのかなっていう悩みがすごくあって、落ち込んだりして、ちょっ



今年で3年目になるんですけど、まちの縁側まつりとか、ファミリーフェスっていうのも2019年ぐらいからやってるんですけど、それも500人ぐらいっていう感じで開催したりしています。震災を経験した団体ということで防災講座にも取り組んでいるんですけど、あまりにも被災が酷すぎて実は目が向けられなかったんですね、正直言って。2019年から本格的に取り組んで毎月講座を開いて、街を歩く、生活に密着したっていうことを感じてもらうためにパラコードのグッズを作って販売をしていくっていうこともやっています。今はまちの縁側です。まちの縁側っていうところは高田の駅のすぐ隣なんですけど、本設になります。これは5ヶ所目になりました。2020年の1月に開所したんですけど、すぐにコロナで…っていう状態だったんですけど。その中でも自分たちで何ができて活動がずーっと通して大切にしていることは、子育て当事者の目線に立つっていうことをすごく大事にしています。子育てが社会情勢とかいろんな時代の流れですごく変化してきても多種多様な家庭に寄り添っていきます。ここは調乳

と病んだりもしたんですけど、その時に局の先輩から、「あの映像があって世界に発信されたから、世界中の目が日本に向けて、支援がたくさん来たと思えば救われなかい。」って言われた時に、スッところ、荷物を下ろしたような、ちょっとだけ気が楽になりましたね、やっぱりそういう、いくらつらいひどい現場であっても撮ることの必要性っていうのを感じた次第です。

**坂口** ありがとうございます。その意味でいくと英里さんも自分の生まれ育った土地が変化していく様子を見てきた。そこでカメラを向ける、新聞という形のカメラを向けるっていうことにはなるけれども、その撮影をする、撮るということの抵抗感とか、その時の思いっていうのはどんな感じだったんでしょう？

**鈴木** 工藤さんと全く同じで、やっぱりものすごい抵抗がありました。今、私があの震災当日

室があって、床暖で、本当にほっと一息つける、いつ来ていつ帰ってもいいような居心地の良い安心なスペースを用意しています。子育てと同じように本当に柔軟に対応するっていうことで今出来る事を一個一個、地域の中でも笑顔の輪を広げるとい活動をしています。

**葛巻** ありがとうございます。皆さん2時間くらい講演できる方々ですが、今日はコンパクトにまとめていただきましてありがとうございます。ちょっとだけご紹介すると、早川さんは北九州市の出身で、震災を機に岩手に入ってくださいって、そのままずっと宮古でみやっこベースの活動などをしてくださっています。阿部さんは大槌の方で、震災直後に団体を設立されて、活動したのは3年ぐらいでしたかね？

**阿部** 2年ちょっとぐらいかな。

**葛巻** そうですね、2年ちょっとでしたね。大槌で団体を立ち上げ、その後次の方に代を譲って今は別の活動をしています。今日も実は埼玉

Table 1

災害情報を見直すメデイアを通じて

Table 2

支援する側に立った時、自分たちは何ができたのか

Table 1 の自分が撮った写真を振り返っても、やっぱり人の姿って撮れないんですよ。撮ってても後ろ姿、要は逃げてきた人たちの姿を撮ったりはしてるんですけど、それって津波を見る前で、津波が襲ってきからは、それを呆然と見つめてる人たちとかの姿っていうのは、やっぱり撮るのが憚られました。その無音の世界になっている中にシャッター音だけが響くっていうことの何か恐ろしさというか、でも撮らなきゃっていう気持ちはあるんです。これ遣さなきゃと思うし、遣さなきゃ気持ちでやっぱり撮ってるんですけど、人の方向を見てはできなかつた。後からうちの社員に聞いたところ、やっぱり同じように、遣さなきゃっていう気持ちで避難してきた人たちを撮ったら、掴みかかられたっていう人がいました、記者の中に。若い男性から、「お前たちだって地元だろうが！何やってんだべ！何でこんなの撮れんだ！」って、掴みかかられてしまった、と。「本当にあれはやっ

ちゃいけないことだった。少なくとも俺たち地元の新聞がやっちゃいけないことだった。そこにいる人たちの気持ちが一番わかるはずなのに、自分だったら撮られたくない。俺だって撮られたら怒るだろう。だけどそこでやってしまったことが悔やまれる。」って言ってたんですね。それも正しいと思うし、一方で、そこで撮って遣すっていうことの大事さっていうのも後になってよくよく考えるようになりました。

要は、どんなに言葉を尽くしたって、記録で遣したって、1枚の写真がどれだけその状況を雄弁に語るか。先ほど工藤さんがおっしゃった通り、その撮った映像なり写真なりが、外の人に見てもらえて、こんなにひどいことが起きたんだって知ってもらう。それが後世にも伝わるっていうことの大事さ。このバランスを考えると、どうするのが正しかったのかっていうのは今でもわからないです。だから私達地元の人間は、それがとても難しいと感じて葛藤してき

らの課題感があるので自分で活動されて、そういったものがあつたからこそ、震災後も活動しているということのご紹介でした。

今日のこの分科会：テーブル2については…、あ、すいません。先に私も簡単に自己紹介したいと思います。私は花巻出身で、一度県外に出て、今戻って花巻に住んでいる葛巻徹と申します。私自身も2006年ぐらいから、実は当時サラリーマンをしながらNPO活動をしていまして、ちょうど子どもが生まれた後ですね。子どもたちのために何かできることがないかなと思って、花巻の若者たちでイトーヨーカドーの屋上で盆踊り大会をしたりですとか、24時間で100キロ歩く企画ですとか。そういった地域活性化活動をいろいろと3年ぐらいやってきました。そういう活動をしているうちに、ちょっと思ったのが、私を含めて地域活性化活動をしながら生活をしてる人たちは、なんかあんまりこう…社会で報われてないような感じがしました。例えば、この活動をして『偉くなりたいたのか?』とか、『目立ちたいのか?』とか、そういう事を言われることもあったりしてですね。

Table 2

支援する側に立った時、自分たちは何ができたのか



から来ていただきまして、どうしても私、敬一さんから当時の話を聞きたいと思って今日はお願いして来ていただきました。伊藤（聡）さんは私も同年代で、震災前から付き合いがあったんですけど、震災前から釜石で活動されていらっしゃって、震災後に釜石で団体を立ち上げたんですね。

江刺さんの活動のきっかけは、海外で活動されて、その後大船渡にUターンをされて、震災前から活動をされてきた、というところでした。伊藤昌子さんも震災前のご自身の子育て環境か

ましたけれども、そしてまた全国紙の方たちとか全国のテレビ局が、遠慮会釈なしにそういうのを撮っていく姿に対して嫌悪感を覚えたこともありました。それでも、そうやって遺してもらったってということに関しては、大事なことだったな、という複雑な気持ちがあります。

**坂口** 一方で取材される側という立場だと敬子さんになります。敬子さんは震災の夏ぐらいまでは、言葉を選ばずに言えば、普通のおばちゃんだったわけですね。その後、復興食堂を手がけて、今は語り部をしています。大切な故郷が変化していく様子を見続けてきた。自宅は被害を受けていないけれども、実家が被災をしたり、いろんな被害を受けている1人です。当時はまだ、発災から数ヶ月の間は、直接撮影されるってことはなかったと思います。でも、知り合いをたどったり、お父さんが生きていないか一生懸命探したり、いろんな動きをする中で撮

そういう環境もあったので、団体さんたちを応援することによって、もっと岩手が良くなるんじゃないかなってということで、花巻でそういう団体を応援する活動を始めました。実は岩手県ではそういうNPOを応援するNPOが多いって特徴があって、震災の時に、釜石の団体の方がそういうNPOをやってくという話があったので、今日パンフレットもお配りしていますけど、2011年にいわて連携復興センターの立ち上げにも関わらせていただきました。その時はサラリーマンをやっていたので、NPOに転職して今も活動を続けているという感じでございます。本当に直近でいくと能登の災害とかもありましたけれども、なかなか皆さんの活動って、誰かにやってけろって言われてやってるわけじゃないじゃないですか。だから例えば、行政がそれを誰かにしてほしいなと思ったとしても、それって本当に普通の市民の方が時間や何かを削ってやるしかなくて、今日は皆さんのそういった活動を始めた経緯の話だったり、想いを伺うことによって、今後も地域で市民活動がスタートしたり、それが応援される、そういった岩手に

影する人たちがいた。そういうのをどんな思いで見えたのか、率直に聞かせていただきたい。

**岩間** 震災から8ヶ月目に、11月なんですけども、今の団体を立ち上げて、皆さんも知ってると思いますけれども「おらが大槌復興食堂」っていうのをやりました。本当に震災後、正直、食堂を立ち上げるまでの夏までの間っていうかは、取材で入ってきてる人たちを、住民的には避けてる感じ、できれば受けたくない。私自身も、住んでた家は大丈夫だったんですけども、すぐそばの避難所に毎日行かなければ情報が入らない状態で、職場もない状態で、自分の家族、行方不明になってる家族を探す、その毎日で遺体安置所に行ったりすると、駐車場のところでやっぱり取材者がいらっしゃるんですけど、正直逃げましたね。受けたくないみたいな。今はそっとしておいてよ、みたいな。本当にそういう気持ちで過ごしていました。

なればいになってことを思っています。よろしくお願いします。

今日の登壇者の皆さん、県内沿岸部の近い地域で活動してますけども、実はなかなかね、お互いに想いを聞く機会もなかったりしてるので、もし何か最初に質問とかあれば……大丈夫ですかね？

今日のテーブル2では、私の方で皆さんに事前に質問を考えてスケッチブックに書いて来ておりますので、それをベースにスタートできればなって思っています。さっきの報告でも皆さんからもうすでに触れていただいた部分はあるんですけども、これらの質問ごとに皆さんから一言ずつお話していただければなと思っています。今、活動報告していただいたのは震災以降のことでお話いただいたんですけども、最初の問いは、そもそもこういった市民活動とかボランティアに関わる最初のきっかけは何だったのか、を伺いたいです。敬一さんからは阪神淡路の話もありましたけれども、最初に震災復興に関わらず、NPOとかボランティアに触れたきっかけみたいなところを聞ければな、と思っております。

Table 1

災害情報を見直すメデイアを通じて

Table 2

支援する側に立った時、自分たちは何ができたのか

Table 1 坂口 欲しい情報が、自宅が残ってても避難所に行かないと得られないっていう状態、テレビと新聞だとどっちを頼りにしてたんですか？情報を得るために。ラジオ？

岩間 テレビ、新聞って言っても、テレビが映らない状態だったので、在宅避難者なんですけども、自分の地域で電気が通ったのが1ヶ月半後なんですね。なので、その間はテレビで東日本大震災の状況、自分の町の状況すらも、テレビで見るっていうことができなくて、毎日避難所に行って、1週間目ぐらいかな、そのときに初めて岩手日報さんの新聞を読んだっていう感じです。ただ、結局避難所にたくさんの方がいるので、新聞を取るじゃないですか。そうすると人数分新聞が来てるわけじゃないので、結局最初に取りっていった人たちはわかるけど、だから1週間後に読むって言っても、日にちがもう何日か前の新聞でしたね。

坂口 みんなとにかく情報が欲しくて新聞を取り合っていたという感じ？

岩間 そうそうそう。最初に手に取った新聞に求めた情報は何でした？何の情報が一番欲しいと思って見ました？

岩間 最初に見た新聞は、被災の状況を空撮した写真が写った新聞でしたね。どこの新聞かまでは覚えてないけども、福島から宮城、岩手っていう感じで被災地の上空写真が載った新聞を見たのが最初でした。

坂口 今振り返るとどんな思いでそれを見てたでしょう？

岩間 いや、もう衝撃的だったので、こんなにも広範囲で、本当にすごかったんだっていうのを初めて知ったっていう感じです。なんか自

Table 2

支援する側に立った時、自分たちは何ができたのか



まずは、早川さんからいいですか？

早川 はい、僕はですね、こちらに来るまでは本当に一切と言っていいぐらいボランティアはやったことがなかったので、東日本大震災の災害ボランティア活動が初めてです。ただなんとなく知る機会はあるまして、阪神大震災が小学2年生で、うちの近所に避難のために同い年の女の子が引っ越してきまして、そこで話を聞くことがあって。大学生の時には、バイトしてるところの店長さんの息子さんが中越の地震の時に

ボランティアに行ったっていう話を聞いていて、なんとなく災害時のボランティアって自分だったら何ができるんだろう、と実は考えていた時もありました。今回に関しては、本当に海外から帰って来てすぐで、自由な時間があったという身だったので、それをきっかけに、2011年に初めて宮古に来ました。その後、地元のボランティアの方々が復興支援を長くやって行きたいということで任意団体が立ち上がって、そこに誘ってもらって、色々勉強しながら活動を続けてきたという感じです。

葛巻 はい。ありがとうございます。敬一さんはいかがですか？

阿部 阪神の時はまだ勤め人やってて、友達とかもいっぱい被災して、その時何やれるかってせいぜい地元のスーパーで買えたちょっとした食料を持って友達のところに行くぐらいしかできなかった。というのはやっぱり仕事してますし、大阪と神戸では全くもう別世界だった。神戸は災害で大変なことになっていて、でも大阪は普

分のとこしか情報が入ってこないの、自分が大槌だからかもしれないけど、岩手県だけだったのかなってしか思ってなくて。それが、その上空写真を見た時に、こんなに広範囲の津波だったんだと初めて知ったっていう、衝撃的でしたね。

**坂口** ある意味、新聞という情報が与えてくれたものっていうのは、客観的に今の状況を捉えることができる、ちょっとした冷静な時間を与えてくれたものだったように、今の話を聞いて思いました。

その辺りでいくと、斎藤さん、その当時高田に着任して取材をするのは2012年以降でしたけども、もう発災直後からよく高田に来て取材をしておられました。当時取材で、これだけは取材をするんだ、またはこれだけは心がけていた、注意していたとか、日々取材を重ねる中で思っていたこと、大切にしていたことなどあつ  
通に仕事が動いてて、その中にいましたんで、何かそのギャップと、こんな大変な時に仕事かよって言う。その時に思ったのは自分が、何か事が起こった時に、やっぱりそういう生活なのか、自分なのかっていうことで諦めてたんですね、『できない』って。これはもう自分で時間とかコントロールできるような状態にいなければ、何かあった時に本当に動けない。それをその時に感じて、東日本大震災でたまたまUターンして岩手に帰って来た時にそれを経験して、今度は全部思ったことは何でもできる、というところで震災の当日から近所にうちの米でおにぎり作って持ってったりとか、まあいろんな活動をし始めて…そこからですね。あとは避難所とか回って、人探しを、親戚とか探してる時に声をかけられて、1000人規模の避難所、大槌高校でしたけれども、そこで食事なんかかならないかって言われて、もうそれから一か月ほど、毎日通ってその食事を作ってまして、1ヶ月くらいした時にもう避難所で回せる体制を作るべきだと思ったんで、俺はもう引いて、外に目を向けて何か出来る事はないかって思って、産直を



たら教えてください。

**斎藤** はい。先ほど岩間さんの話で、私も遺体安置所にずっと1日いたな、と思って。今ふと思い出してですね。何でいたのかなというと、多分、本当につらい状況の中で、安置所に来る人たちにもお話を聞いて、どんな思いなのかを伝えなきゃって思うんですけど…多分1日ずっと居ても、本当に何人かしか取材できなかったけど、なんか…うん…居たなと思って。はい。

立ち上げたりとか、まあだいぶ避難された方から変な目で見られましたけど、バイパス沿いの花壇を整備し始め、まだ瓦礫をやらなきゃいけない時に、花壇を整備し始めて、その後NPOさんに人的なサポートをもらって活動を続けたけども、その辺りで、何か…何だろう、そういう地域で何か役に立てないかという活動はそこがやっぱりスタートでしたね。

**葛巻** 3.11もある種の機会になった、ということですかね？

**阿部** はい、そうですね。だからあの時、変な武者震いがしたんです、3月11日の当日に。いや、大変なことが目の前で起こってるんですけども。町を何とかしたいという思いがあったんですよ、震災前から。つまんねえ町だとかいろんな思いがあったんで。何かここで、いろんなものを変えていけたらなと思ってたんですけども。『あ、これリセットされるな。』と思った瞬間になんかもうゾクゾクワクワクしちゃって、不謹慎ですけども。ここで何かを変えるチャンスだ、

Table 1 震災の直後はですね、もう起きてることを伝えなきゃって思いがあるので、携帯電話とかも遠野に帰ってもまだ最初は通じなかったの、逆に本社からの連絡が取れないというのは逆にいいことなんだなって、今思うと。携帯電話が通じないということで、勝手に取材して勝手に原稿を出してですね、あとは知らないよと。でも意外とそれで1週間ぐらい新聞はできてるんですね。今だともう、これやれあれやれって電話がかかってきてですね、いや、まだ取材してるから、みたいなことが結構あるんですけど。

災害情報を見直す  
くメディアを通して

でもみんな一生懸命必死になって、震災の現場を伝えようと思っていたこととですね、あと覚えてるのは、この避難者名簿、東海新報さんもやってましたけども、岩手日報でもやっていて、あとIBCさんではラジオで避難者をずっと読んでたんですね。私3月15日に広田に行って、多分、岩手日報の車を見た人が「盛岡から来たんだったらこの避難者の名簿をIBCさんに  
~~~~~  
何かやってみようって思ったのがきっかけですね。

Table 2

葛巻 はい、ありがとうございます。じゃあ聴くん、お願いします。

支援する側
に立った時、
自分たちは
何ができたのか

伊藤（聡） はい。それで言うと自分は24歳の時なんですけど。震災で被災したのが31歳で、震災の何年か前から、いわゆる市民活動に関わり始めたって感じなんです。ちなみに最初から意識が高かったかっていうと全然そうじゃなくて、自分は釜石南高校って、割と進学校で大学行く人が多い高校の出身でして、自分は部活が終わったら遊びほうけていたら大学受験に全部失敗して、全部落ちたんですよ、大学。しょうがないから、仙台の専門学校に行ったら学校もろくにいかずにパチスロばかりやって、そのままパチスロでちょっと生計立てる、みたいな。そういう経歴なんですけど。

たまたま釜石に縁があって働き出して、でもそこでも商店街振興するような組合で、実は当時の上司は、NPO法人アットマークリアス

伝えてくださいな。」っていうのを言われて。これはもう、我々が取材をしてどうこうとかっていうんじゃないで、みんなとにかく情報を求めてるんだなって。

私達は1週間のうち3日か4日ぐらい遠野の民宿に泊まって、あとは3日か4日取材して盛岡に帰る日々で、その頃盛岡は1週間ぐらいすると電気も通っていたので、沿岸とのギャップが、2011年の夏ぐらいまでは続いてたんじゃないかな、と思います。陸前高田は避難所が一中で閉所したのは、8月のお盆の前なので、そのあたりでなんとなくフェーズが変わっていくので、こちらとしても、次何の取材をしようかな、みたいなことを考えて。その時には私も支局に着任して、大船渡に住んでましたけども、大船渡から通ってたので、という思いですね。すいません、まとまらなくて。

坂口 敬子さんが、テレビを見られるまで1ヶ月半？かかったっていう話がありました。藤堂 NPO サポートセンターの川原さんとかが最初の上司だったりするんです。だからこっちの商店街を元気にして行こうぜ！みたいな、そういう仕事をしてた最中、たまたま24歳の時に知り合いから声をかけられて、『若い人でいろいろやってるこういう団体があるから、どう？』ってお誘いを受け、たまたま行っちゃったんですよ。最初は何となくみんなと、若い人と飲み会したりとかって感じなんですけど、だんだん子ども向けのイベントを年に1回やったりとか。いろいろやっていくうちにハマっていったんですよ、市民活動に。その後、地域医療を考えるような団体を作ってみたりとか、27歳で観光にも取り組んだり。釜石市って観光の要素があまりなかったんですよ。まあ鉄で栄えた町だからってのもあって、いわゆる“観光”が釜石にはこれから必要なんじゃないかっていうところにピンときて、観光地域作りですよ、いわゆる。それをやり始めていきました。そしたら、宝来館の女将さんに出会って、2010年の3月から雇ってもらってグリーンツーリズムをやり始めたら一年後に被災するっていう感

さん、よくめんこいテレビの中でも取材して局に戻ってきて話題になるのが、誰のために取材してんだろうって、よく編集室で話をしたのを、今思い出しました。あの時の話をぜひ聞かせてください。

藤堂 沿岸の被災された方はですね、我々のテレビを見れるような状態じゃない、でもテレビって24時間放送してますので、24時間のあの枠を全部埋めなければいけないんです。埋めるっていう言葉は変ですけども。全国ニュースでやるのが1週間ぐらい続いて、体力的に限界があるんですよ。よく話題になるのが、もうバラエティー流すのかとか、このご時世にこの番組を流してるのかっていう批判が正直ありました。我々はですね、なるべくそこは避けようと、深夜はひたすら行方不明になった方とか、生活情報を文字だけの情報でずっと繰り返し読んで、という風な状況を作ったんですけど、実は、
じだったんで、きっかけで言えば24歳の時なんですね。あれもう…震災直後から、ボランティアコーディネートの立場で活動してきました。自分で言うのもアレですけど、初動はだいぶ早かったと思ってるんですよ。それって、これまで市民活動だったりそういうボランティアにいきましたっていう経験がすごく大きくて、どう動けばいいかっていうのがなんとなくわかるんですよ。なので未だにこだわってボランティアコーディネートをやってるっていうのは、実はそれが活着しているということです。

葛巻 はい。続いて江刺さん、お願いします。

江刺 はい、私もまさにインドにいた時なんですけども、最初はですね、ボランティア活動に携わっている人たちって「えらいだろう」みたいな傲慢な空気を感じて、しかも私は20代で反抗期が遅れて来ていたものですから、ボランティア活動をしている人間に対しての不信感が大きかったです。

しかし、道端で人が亡くなったり、物乞いの

れが全く届いていない。これは何のために放送するのかな、という風なのは正直ありました。ただ、我々のメディアっていうのは全国の方に発信できるので、これを見た東京の人が宮城の人に伝えて、宮城の人から岩手にいった、というようなものもちろほら聞こえてくるようになりました。どう現地の方に届けるきっかけになるかわからないから頑張ろう、ということで、報道したのを覚えています。

テレビというメディアがズカズカとはいつてカメラを構えて、しかも我々ってペンではなくて、カメラを向けてインタビューに答えてもらわなければ放送にならないというメディアです。さらに、テレビの報道記者って、画面の前で喋らなければいけないんですよ。例えば避難所をバックにして喋った、「お前さ、この前あそこの避難所でこんなこと喋ってたけどな。」っていう矢面に立つ立場でもありました。ただ、そこは我々の使命というか、そういったものなので、
子どもが大勢いたり、彼らの生活を垣間見ているうちに、あるときふっとボランティア活動に入り始めたんです。

いろいろ金銭を集めたり、それで物資を買ったりして、いろんな施設に寄付しました。カースト制度が生きていますので、支援対象者は底辺といえば底辺の環境なんですけど、寄付者に対して崇めるように『ありがとうございます！ありがとうございます！』みたいな感じなんです。『いやいや、そんな風に言わないで。あなたたちが居るから私たちの活動がある。』っていう風に思うんですね。まるで寄付者の地位が高くて、もらう方は地べたすれすれみたいなはっきりと格差が見えるわけです。私たちは同じ人間同士で、嬉しいときは嬉しいし、悲しいときは悲しい気持ちを抱くことに変わりはないのに。当時私は2人女の子を出産して絵本を読み始めていた経験から、絵本や紙芝居の読み聞かせでみんなが笑顔になるってことを試みました。『あー、面白かったねー！』って、この楽しい時間を共有する、楽しい気持ちを分かち合うっていうところで、『同じだね。』を表したかった

Table 1

災害情報を見直す
メディアを通して

Table 2

支援する側に
立った時、
自分たちは
何ができたのか

Table 1 いろいろ葛藤しながらやっていたのを覚えていますね。

坂口 こういう話をしていくと、あの緊迫した状況の中で必死になっていた、必死になりながら取材をしていた、その一方で取材されたくない、そっとしておいてっていう三陸の方たちの率直な思いもあったっていうことが、何か見えてきました。

ちょっとここで、1回、箸休めじゃないんですけども個人的に失敗談の話を知りたいなと思いました。英里さんからさっき失敗談二つあったっていう話があったので、ちょっと失敗談の話を知ってもいいですか？

鈴木 はい、じゃあどうしようかな。この支援要望リストについてご説明したいと思います。取材してる時にですね、大きな規模の避難所と小さい規模の避難所とか、あとは学校避難所と、
~~~~~  
というのが、私の読み聞かせの最初、ボランティアの始まりですね。それを日本に来てまた継続したっていう感じです。

**葛巻** はい、ありがとうございます。伊藤昌子さんお願いします。

**伊藤（昌）** 私、皆さまの話を聞いてて、ボランティアいつかな？って振り返ったんですけど、陸前高田市に太鼓フェスティバルってあったの知ってます？そこで私、市役所の臨時職員をした時に、『やってみたら？』って言われて声かけられたところから始まったんだよね。自分から率先してっていう感じじゃなかったです。それが最初。

それが二十歳くらいか？子どもが生まれて、さっき言った乳幼児学級で、『ボランティアってあるんだ。』っていうのを知って、そこでつくし乳幼児学級っていうのを自主活動でやってたんです、サークルみたいに。それやってたんだけど、グループごとに輪番制で連絡網を作ったり、企画を作ったりしてたら苦しくなってきたんです

個人のお宅とかお寺さんとかね、避難所って、結構格差があるなっていうのを感じてたんですよ。要は、テレビとかで報道が多い避難所にはたくさん物資も届く、支援の手も届く。けどそうじゃないところにはなかなか来ないとか。あとは、届くんだけどすごく偏ってるとか、数が足りない、むしろ多いとか、そういういろんな困りごとがあったんですよ。そういった話を聞いてると、避難所の規模、何人避難してるのか、どういう人がいるのか、何が足りないっていうのは出さなきゃいけないんじゃないか、と考えまして、編集部の中でみんなで手分けして避難所一軒一軒歩いて、何が必要なのか聞きましよう。かなりの数があったんですよ。けどみんなで手分けしてまわって、いいリストができたってすごい自己満足をしてたわけですよ。私達頑張った、役に立ったってね。でも今度は、その時に求められてるニーズとかフェーズって、すぐ変わるんですよ。昨日までは足  
~~~~~  
よね。当時自分たちで何も決めないで和室で集まって、同じような年代で同郷で楽しみながら始めようよって言うのがサークル活動のきっかけだったんですね。でもその中でもやっぱりいつもの見たかったって、来てくれて来たんだけど、でもやってるうちにただやってるだけじゃなくて自分たちで運動会だったりとか、講師呼んで一人一つやってみようみたいなのが、お金なくてもできるね、楽しいねに発展していったような気がします。お金なくて、気仙地域の中で気仙地域子育て支援ネットワーク「Wa-i」っていうのが自主サークルですね。それは大船渡市議会、高田、気仙、『ここは一つ』って言ったんですけど、そんな感じで始まったっていう感じですね。

葛巻 はい、ありがとうございます。今皆さんからお話を伺ったように3.11の時もやっぱりいろんな選択肢が皆さん自身もあったということですね。その中で今の活動を取り組んでこられた。もしかしたら他にも選択肢があるなら、それは引き続きその活動の方向性でやろうってこ

災害情報を見直すくメディアを通して

Table 2

支援する側に立った時、自分たちは何ができたのか

りてなかったけど今日は届きすぎるとか、そういうことが往々にしてあるんですよ。むしろこのリストを作ったことによって、こればかり届くとか、そういうことが起きてしまったんですね。

あとは、可能な限り問い合わせの連絡先とかも掲載したんですけど、そうすると結構余計な連絡が増えてしまう。なんでしょね、良かれと思って電話するんだらうけど、それがかえってその運営の妨げになってしまうことが起きて、こんなにも必要とされている物って刻一刻と変わるんだって、今これが困ってるんだからこれをやったら感謝されるだらうってというような、すごい浅い考えでやってしまったっていうのが大きな失敗でした。

だから今もね、能登半島の地震があって、同じようにテレビとかでね、これがどこそこで足りてません、みたいなことを言うことにすごい危機感を覚えて、何かこういう私達の失敗とか

~~~~~  
とで思ったと思いますし。  
早川くんの、ボランティアの期間が終わったら地元の北九州に帰るっていう選択肢もあったと思うんですけど、でもやっぱり活動を続けた、始めた、その原動力って何だったのかなっていうのを聞きたいなと思います。

早川 そうですね、僕が初めて来たのが6月でした。宮古市の災害ボランティアセンターが県外個人ボランティアを受け入れ始めたタイミングだったんですね。で、最長2ヶ月間活動して、



ちゃんとやっぱりなかなか活かされないもんだなっていうのを感じたりしています。

あと、これは失敗というか、まあ難しいなって改めて感じたことで、今だったらこういうことはやらないなって思ったのが、火事場泥棒の話。やっぱりこれも取材で歩いてて、いろんなものが盗まれてる、という話を聞いたわけですよ。実際に金融機関とか、市職員を装っているんなものを騙し取ろうとする人たちも実際にいたんですね。注意を呼びかけられたりもしてましたし、お店が被災したところは売ってる物をね、例えばタイヤとか、貴金属類とか、そういうものを盗まれちゃったっていう話も実際にありましたし、あとはその被災した車からガソリンを取り出そうとする人たちが結構いたんですよ。結構見た。実際それで警察に捕まって御用になった人もいるんだけど、だけど、そういう時にね、いや、これ自分の車なんですよって言われたらわかんないんですよ。

~~~~~  
地元に戻って就活をしようかなと思ってました。最初は2週間ぐらい宮古で活動して、だんだん南に下って行けたらいいかな、とかなんとなく思っていたんですが、活動に行ってみたらすごくボラセンの職員のみなさんが親切でした。地元のボランティアの人たちもすごい賑やかというか、楽しげに、外から来るボランティアの人たちを盛り上げていただいて、大変な状況ではあったとは思いますが、そういう風楽しく活動してました。飲み会にもいろいろ誘っていただいて、皆さんと仲良くなっていくにつれて、2週間やって南に下ってまた新しい地域っていうよりは2ヶ月間宮古で活動した方が関係者とも仲良くなって、より良い活動ができるかな、と。一週間もいれば、外から来たボランティアとしては長い方になるので、中と外を繋げようなんて、なんとなく役割を感じてて。

さっきもお話しましたが、地元のボランティアの人たちが継続的に宮古のまちづくりとか復興を盛り上げたいという風に立ち上がって、そこに加わってくれないかと声をかけていただいて、かなり悩んだんですが、皆さんとお話をし

Table 1

災害情報を見直す
メデイアを通じて

Table 2

支援する側に立った時、自分たちは何ができたのか

Table 1

あとは取材してて、大きなカバンを背負って何でも手当たり次第に詰めていく外国人がいるって話を聞いたんです。実際自分もこれ、被災した家の片付けして、使う物を取り出して置いといたんだけど、次の日行ったらもう無くなってたんだって話を聞いて、そういう外国人がいるってことを書いてるんです。だけど、それは私が見たわけじゃないから、警察とかの裏が取れてるわけじゃないことを、この人がこう言ってるからって書いてるんですよね。これってすごい危険なことだな、と思いました。今は、本当に後悔してる。これって、要は差別を助長するわけですよ。実際さっきも言った通り中国人研修生とかもすごい多い地域で、能登でも起きましたよね。外国人が入り込んで、ハイエースに乗って窃盗をしてるっていう話とかがありました。デマでしたけど。こうやって、なんて言うのかな、思い込みかもしれないし、外国人っていうことに対する偏見かもしれないんだけど、

災害情報を見直す
くメディアを通して

Table 2

ていく中で、自分がよそ者としてできることがこの街に対してあるのであれば、残ってちょっと頑張ってみようかなと思ったのが最初ですね。ただですね、その団体は一年ぐらいで解散することになっちゃいまして、悔しさもあり、消化不良感もあったんですが、当時中学生の学習支援で子どもに関わっていたこともあり、団体が解散したのが9月なんですけど、途中で帰っちゃうのはその子たちにとって可哀想だなと思って、切りのいい3月中くらい年度末まで居ようかなと思ったんですね。そうしたら、自分に何か残せるものはないのかなとふと考えるようになって、復興って何だろうってずっと考えてましたし、みやっこベースという形に最終的になったんですが、今自分が置かれてる立場で必要だなと思うことを考え抜いて、それを団体として残して帰ろうという考えに至りました。そういう意志みたいなところもありますし、年数が経っていくにつれてそれが意地が変わってきて、何とかこうやってきたことを残して、それを街の未来に繋げるということで、今の活動にもつながっているなあって思います。

支援する側
に立った時、
自分たちは何が
できたのか

そういう不確かな情報を、そう聞いたからといって載せることが、メディア自体がデマの加担をしてしまうことになりかねないわけですよ。情報に関しては本当に気をつけて扱わなきゃいけないなって、今めちゃくちゃ後悔してます。

坂口 なるほど。おそらくテレビという媒体と新聞という媒体で、発信する情報ってまた少し違う部分があると思います。テレビ側の意見を聞いてみたいと思います。工藤さんに聞きたい



葛巻 はい、ありがとうございます。敬一さん 当時はどうでしたか？

阿部 震災前から町に対するイメージとか、やっぱり高齢化も進んでるし、高齢者中心の地域で、若者は大体外に出ていくっていうのは一般的じゃないですか。でも、なんていうかな、やっぱり出て行くのはそこに仕事がないからとか、魅力がないからっていうことだと思ってたんで、だから震災前からもうそこを何とか変えなきゃって、自分が住んでても面白くないし、結局若者もそこに残らないっていう危機感っていうのがあった。

それで3.11に、これを機会にと思った時にやっぱりまず、仕事も無くし、家も無くした若者が、1回出ちゃったらなかなか戻ってくるチャンスはなくなると思ったんで、なんとかここで踏み止まって、ここで仕事をしていくっていうものを作らなきゃいけないと思ったんで、おらが大槌夢広場を作ったんです。夢広場って、まさにここで夢を語れるような、若い人たちがそこで夢を広げていって、何かを形にしていく。

です。情報の中でも取材できる情報と取材しにくい、取材はするけれども放送できない情報っていうのもいろいろあったと思います。当時のその混沌とした状況を振り返って、本当は放送したい、伝えたい、知ってほしい、でもこれ放送には乗せられなかったっていう情報って何かありましたか？

工藤 震災から間もない頃っていうのは、言葉が悪いんですけど、何撮ってもニュースになるんですよ。あまりにも激しいので、どこを撮ったってすごい映像なんですけど、一方で、4、5日、1週間もしないうちに、すごさに慣れちゃって、自分の中で取捨選択しちゃってるんですよ。これは前に撮った気がするから、例えば車が亀のようにひっくり返って重なってるとか、壁に立てかけるようにトラックがいるみたいなもので、もう見慣れちゃってるんですね、良くないことなんです。そうなる自分の中でもう撮

それを都会じゃなくてもこの地域でできると思ったし、それを自分自身もやってみせたいと思って、阪神からの流れからそうやって来て、そんで今Uターンして、『いや、できるよ』っていうところをまずは自分がやって、そして仲間とそれを少しでも進んでいく、当時高校生だった中学生だった子らもそれを見て、おらがの活動に関わってそれを体現していく中で、地元に残って何かを見つけ出そうとか、そういうものを作るまではやっぱりおらがの存在意味があるのかなと思ってやってきました。

そして実際、当時中高生だった子らが来て、地元に関わりたいという形で関わっていくんですけども、とにかくやっぱり面白いこと、何かワクワクすることは誰かが与えてくれるものじゃなくてやっぱり自分から生み出すもの、その感覚を体験してもらいたいと思って、いろいろ活動を続けていました。そして、代が変わって事業を、当時はもう何をやっていいかわかんない、何が正解かわかんない、色々やったけど、フェーズが変わって無くなったっていうようなプロジェクトもいっぱいあるんですけど、その

らないんですよ、一回見たことって。どんな映像でも、本来は撮っとけばいいと思うんですよ。どこの映像、何の映像を使うか、使わないかっていうのは、担当してる編集の人だったりとか部長とか局長が判断すればいいことであって、現場のカメラマンがあんまり判断してはいけないんじゃないかなと、今になって思います。あまりにも悲惨な映像だって、50年100年したら多分悲惨さを伝える意味で、アーカイブにしときゃいいのにやっぱり撮らないとか。でもね、カメラ向けちゃいけないよっていうのは、思い悩みますよ。それは現場での判断で。あまりに可哀想で、泣き崩れてる人っていうのはやっぱりカメラ向けられないんですよ、基本。

でもきっとこれ写真1枚綺麗に収めれば、1枚の写真が物語る悲しいシーンとして、これだけ大変な思いをした人がいたんだっていうのが如実に伝わるわけですからね。やっぱり、使う、使わないは置いて、カメラマンたる者、と

中で将来的にこれが必要だと思ってやったのが、たまたまいろんな支援があって、きっかけがあって、リーダーシップ研修っていうのがうまくできて、生き残って、それがメインになっている。当時は本当に、何が正解かわかんないし、とにかくいろんな支援のアイデアが出てたんです。なんだこれ？ってのもありました。ただ、それを整理するのが大変でした。まあでもとにかく窓口というか、なんか地元の子が関わってくれる、そこを一番楽しみにしていましたね。

葛巻 はい、ありがとうございます。続いて、伊藤聡さんお願いします。

伊藤（聡） 最初この問いを見た時に思ったのが、全然理由なんかないでしょっていう風に思ったんですよ。あんな状況が広がっている中で、活動するのに原動力とか全然関係ないよねっていうところが最初思ったこと。だってやる事だらけだし、自分がやれることがあるんだったら、そりゃやるでしょっていう。ただこういうところが、周りからまあ楽しい風に聞こえたのか

Table 1 にかくまわすんだって。

災害情報を見直す
くメディアを通して

これ失敗談にも繋がって、私は避難所とか体育館とか行くと、地元なので必ず知り合いがいるんですけど、「ああ、生きてたんだ。」まずそれから始まりますね。「生きてたんだ〜」って言ったら、次は「こんなん持っていかれてさ〜」みたいな話をその知り合いのお母さんから聞いて、子供2人におにぎり1個を半分に分けて、自分は何も食べないでって、そうかそうかって言って、取材に入った体育館なのに撮れ高ゼロで帰ってきて、盛岡に電話して、「すいません、何も撮れませんでした。」っていう。なんか、どこに行っても一緒に泣いて撮れ高ゼロっていうのは何回もあって、やっぱりこれね、地元の弱いところかな。個人差はあるから、ガチガチに撮れる人は撮れるんでしょうけど、私は無理だったんですね。そこはもう大きな失敗で、いくら泣いていても撮るべきだったと思うし、それで伝わるものがあつたと思うんですね。だからね、応援に

Table 2 な？っていうことがあります。

支援する側
に立った時、
自分たちは
何ができたのか

ちなみにボランティアのコーディネーターが最初ですけど、それを選んだ理由っていうのは明確にあります。当時、自分も最初はすごい落ち込んでたんですけど、自衛隊とかボランティアとか、いろんな外の人たちが被災地に来て、昨日通れなかった道が通れるようになったとかっていう日々の変化を見て、気持ちがかう少し前向きになった瞬間っていうのがあつたんですよ。その時、うちはたまたま家族が全員無事に助かったというのもあって、前向きになれるのが早かつたと思うんですけど、でもいざれみんな前向きになっていってほしいっていうのは、何年かかるかわからないですけど、思います。その時に自分がやれることは自分は外の人たちの動きを見て前向きになったんだから、それが、間を繋ぐ自分がやればいいんじゃないかと思って、やり始めたっていうような、まあ表向きはそんな感じです。

裏の理由っていうのが二つくらいあって、1個は楽しかつたっていうことがあります。早川くんと一緒に、いろんな人が来てくれるじゃな

来るのはいろんな所から入って、広島とか沖縄、琉球朝日とかですね、秋田とかたくさん来てくださって、そういう方がしっかり取材していくのは本当に頼もしく心強く見てましたよ。

坂口 今、“撮れ高”っていう言葉がありました。藤堂さんこれちょっと、“撮れ高”って説明をお願いします。

藤堂 それ痛いところですね。我々ニュースというものは、速報性、その日に撮れたものをその日のニュースに返すというのが基本になってますけれども、いわゆるデスクと呼ばれる編集担当が、「こんな感じの取材をしてきて」っていうザクツとしたイメージを、現場に与えます。それに対して、どういうインタビューが取れたとか、こういったものが撮れた、成果が出た時はまあ撮れ高が良かった、と。私もそうだったんですけども、その撮れ高をめぐって常に

いですか。で、交流したりとか、飲んでたらシンプルに楽しいとかがあつたので活動を続けられたっていうのもあるし。あとは震災の前だといろんなまちづくりとかの活動って若い人全然出てこないんですよ。それはたぶんみんな一緒だと思うんですけど、あの頃って、みんな突然、普段35度ぐらいしかない熱が37度5分ぐらいまで上がったじゃないですか。その後だんだん平熱に戻ってきたりとかっていうのもあるんですけど。熱を感じる、だからすごい楽しかつたっていうのはあります。その人たちと一緒にいろいろできたというのが楽しかつたし。

もう1個は、単純に自分の居場所があつたって思ってた。これは当時は全然そう思ってなくて、振り返るといつも思ってたんですよ。役割っていう居場所に自分がすがつたのかなって思います。動いていればやるのが目の前にあるから、他のことに気を使わなくていいっていう感じで、やはり逃げてたのかもしれないですけど。そういう自分の居場所として結局この活動が自分の仕事だなって、振り返ってすごく感じました。

デスクと喧嘩してましたね。「そんなの撮れるわけねえだろ！お前がやってみろよ！」って言うようなものもありました。

先ほど冒頭で、我々の系列で応援のため岩手に入ったのがですね、関西テレビという阪神淡路大震災を経験している局と、テレビ新広島、原爆を経験している局でした。その方々が、「これから先、この取材を、もう君達はずっと向き合わなきゃいけないんだよ」というのを口すっぱく教えられましたね。先ほどカメラを回せなかったっていうところがありましたけれども、「回せないところは我々応援に来た局が矢面に立って撮ってくるから。君らは、1年後、2年後、5年後、10年後、そこまでやんなきゃいけないんだから、そこのところまで考えて取材した方がいいよ。」っていうアドバイスもらった。実を言うと私、被災地に来たって2ヶ月後ぐらいですね。失敗談といえば、その当時のデスク、部長と散々喧嘩して、なんで俺行かせてくれな

葛巻 ありがとうございます。はい、続いて江刺さんお願いします。

江刺 私には明確なターニングポイントがありました。震災の直後っていうのはちゃんと食べて、ちゃんとトイレして、ちゃんと寝れる場所があって、みたいなことを自分の家族や自分の親戚、また自分の住んでいる地区の人たちのお世話というか、そういうことばかりやっていました。顔と顔が見える活動をしてきたので、あの子どもたち、海のそばの学校の子どもたち、



いの？と。当時は、事件とか事故とか火事とか昼夜問わず発生ものの対応をしてきたのに、何でもこういうピンチの時に取材に行かせてもらえないんだ、と。また、いざ中継とか僕がやると、「はい、5分喋って」って、僕5分なんか喋れないので。なので、先輩とかが中継を担当して、僕はずっと本社で各地から来る映像を全部見て、そこをまとめる仕事をやってた。

当時ですね、先輩から言われたのが、届く映像を「全部これ覚えな」と言われて。例えば同じ瓦礫の映像でも、これは大槌の映像だ、これは陸前高田の映像だ、宮古の映像だっていうのを、僕2ヶ月間で判別、悔しいので。僕出身は一関なんですけれども、沿岸の土地がわからないので、これどこなんだろう？っていうのを地図を見ながら全部覚えてですね、満を持して2ヶ月後に行った時に、「どちらの方ですか？」って言った時、「真崎」って言われると、「ああ、真崎ですね。」って言うのと地図が浮かんで、あの時

子どもたちのお父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃんは大丈夫だろうか、そのことをずっと心配していました。おはなしころりんの会員の安否確認をしつつ、ちょっとリサーチをして、大人たちは片付けとかで毎日忙しいけど、子どもたちは手持ちぶさただということがわかりました。ならば、不謹慎かなあと気にしながら家にあった数冊の本を持って、震災から2週間後の日に大船渡中学校が高台にあるんですけど、避難所になっている体育館に行きました。2週間後なので屋内に新聞紙を敷いてその上に土足なので泥が付いていて、寝床には隣の仕切りがない状況のところへ私が本を持って入っていったんですね。そしたら私の姿を見た小学生たちがですね、『あ！ころりんがここさ来たー！』って言って、『おい、ころりんがここさ来たぞー！』とか言って、その体育館中から子どもたちがバタバタバタってすごい大きな足音を立てて走り寄って来てくれたんです。みんな満面の笑顔だったんです。あのバタバタっていう足音と、子どもたちのあの笑顔は忘れません。『これから楽しい時間が始まるよね？』っ

Table 1 の映像はここだと言って、「あそこの漁港のあそこの建物って結構無くなったんですか？」とかっていうのを実際の映像とリンクさせながら取材をした。そこから、我々が撮った映像っていうのと人を結びつけていくことっていうのをずっとやっていた。

坂口 ちょっとここで、よく言われる報道被害という、報道関係者の方からすると若干耳の痛い話かもしれませんが、あえてその問いを投げ

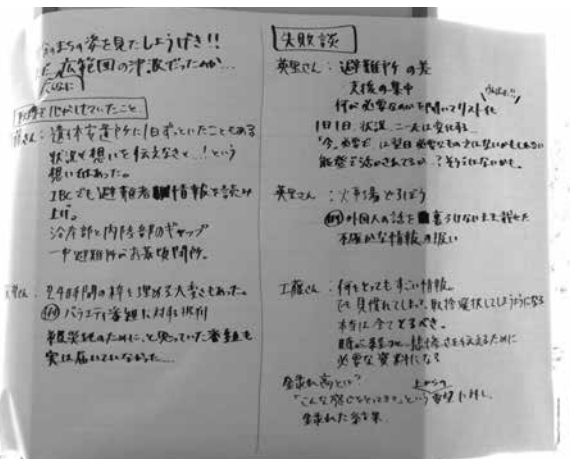


Table 2 ですがるような顔が並びました。あれを見た時にはこの子たちのために何か私に出来る事がある、この子たちが欲しているのならば何冊でも本を読もう、と思ってそこから、そこでどのくらいだろう、もう本当に長い間、何時間かかけて本を読んでですね、『また来る?』って言われて『うん、また来るよ。』『本当にまた来てくれる?』『また来るよ。』って。それでまた行くと『あー！また来てくれたー！』って子どもたちが喜んでですね。これで私、震災の2週間後から13ヶ所を8人の仲間たちと2ヶ月に渡って巡回して、避難所巡回おはなし会というものをやりました。いい話ばかりではなくて、『おめえたち来ると子どもたちうるせえからあっちさ行け!』とか『今日こっちで支援活動で外からいっぱい物持って来てる人いるから、雪降ってっけど駐車場で読み聞かせやれ。』とかですね、なかなかいろんな事がありましたけれども、それをひっくるめて理解してくれくれる大人もいるので、ばあちゃんたちが『ああこっちさ来っぺし。やっぺし、やっぺし。』、終わったらば近くにおじさんがですね、『ちょっとお菓子もらった

かけたいと思います。報道っていうのはある意味功罪、良い部分もあれば、残念な部分もあるというその両極端があります。今のお話の中にも出てきた“撮れ高”っていう言葉がありました。いわゆる「画になるところ」に取材が集中しがちっていう部分があります。そこにはインパクトを求める、そこで2011年から1年ぐらいの状況をちょっとイメージしていただきながら話を進めていきたいと思います。ここは斎藤さんにビシッと、切っていただこうかなと思います。取材するっていうと、組織という立場の中で公的な意識を持った取材者という立場。一方で、たとえ外者だとしても三陸を取材して時間が重なることで、いつの間にか自分も半当事者のような気持ちになる。だから藤堂さんも仰るようにデスクと戦う。「いや、それは違うでしょ」、「その事実はない」、「そんな物語にしちゃいかん」っていう、個人としての戦いという部分があります。ただ記者として情報を取るだけでなく、組

からみんなで分けっぺ。』みたいなそういうところもありました。

尋常じゃない環境、急に環境が変わって普通じゃなかったんで、いつも優しい人もイライラ暗い気持ちになって、暴言みたいなのを吐くのはあるでしょう。そういう時にふと思いました。インドで自分は支援する方だったんですよ。でも今度はですね、被災地にいるので、自分たちも周りに支援をしながら、外部から支援してもらおう立場になったんです。「支援」の内容ややり方って本当にさまざまです。国際NGOから個人までいろんな「支援」を間近でみて、素晴らしさや難しさを学びました。そして、自分たちにしかできない支援の活動が必ずあると思ったところが活動の原動力でしょうか。以上です。

葛巻 ありがとうございます。

伊藤(昌) すごい、お話が上手で・・・いつも江刺さんのお話の後・・・

織の人間として、一方では個人の人間という側面、その辺の葛藤であったり、こういう情報の取り方および、情報の出し方ができたんじゃないかという辺り、ちょっと斎藤さんに伺いたいと思います。

斎藤 はい。今回のことがあって私も当時の紙面を振り返っていて、メディアスクラムみたいなことが発生していたことがあってですね、それが2011年4月の11日に載ってるんですけども、「さよなら高田幼稚園」といって、高田幼稚園の卒園式の手記がですね、一中の体育館…体育館じゃないかな。まあ一中で行われたんですね、避難所で。その時はもう一中の避難所って1000何人もいたので、高田で一番大きかったのが各マスコミが来てる。そこには、行方不明の子が卒園に当たって、その親御さんも来てるんです。親御さんももちろん卒園証書を、子供の代わりに受け取るんですよ。非常

江刺 読み聞かせの語り部だから、すみませんねえ。(笑)

伊藤(昌) やっぱり私も地元なんですよ。それで高田町って、ご存じだと思いますけどすごい被災が酷くて、95%ぐらい流されちゃってる所なんですね。それで唯一遺ったのが一中、給食センターとか、高台のところだったんですね。私も専業主婦で何の資格もないし、スタッフも全員被災してるし、もう絶対無理だっていう風に思って、その当時は実家に避難してたんですよ。子どもが寝静まった時にコタツに入って、電気ついてたかな？実家の父親に『俺も駄目だ～。なんか何もやることねえべっちゃ。何の資格もねえし、職場もねえし、爺ちゃんのちょこっとある猫の額みたいな畑手伝おっかなあ。』なんてボソボソ言ったら、『なに、きらりん始めればいいべっちゃ。』って言われたんですよ。『はあ?!』って雷に打たれたように、『んだ！こんな時だからこそ、今それが必要なんだ！』って何かすごい思ったんですよ、私。やるしかないと思って。次の日にもう給食センターにウ

につらい現場なんですけど、これマスコミって、みんながいるから当たり前のように撮らなきゃなんないと思って撮るんですよ。それをね、載せた社もちろんあったし、載せない社もあった。私も現場に行って、私は載せなかったというか載せられなかったですね。だからそれは、当時はすごくこれは載せるべきことだよなって思いながら、でもやっぱり本人の了解が得られなかったし、本人はもうお話ができる状態じゃなかったから聞けなかったし。ただ画としては残ってる。確かに載せたところあったから、多分、自分の中ではやっぱり載せた方が良かったのかなっていう。そういう人がいたって記事では遺してはいるんですけども、普通に元気に卒園していく子の写真を載せて、みんなで卒園できたら良かったねとか、今振り返ると、本当に報道というかメディアの駄目なことだよな。じゃあどうすればよかったのかってというのは、規制できたものなのか、多分そういう規制ができる

ロウロ歩いて行って、そうしたらいろんな人に会って、『やりたいんだけども、どうすっぺな。』って、『じゃあ一中に行ってみっぺかな。』って思った時に、ちょうど市役所の知り合いに会って、その時にもう避難所の自治会長みたいな人に『やりたいんだけども。』って言って、『なに、校長先生に会わせっから。』って職員室の前の通路の立ち話で『じゃあいつ来んのや?』って。やっぱり避難所の人も、最大1200人くらいになったんですよ、一中の避難所って。居場所って大事だかっていうことで、思ってたんですね。

もう1ヶ月くらいの時に今まで培ってきたネットワークの人たちに、当時ガラケーだったけど、いろんなところを借りながらスタートしたって感じですね。初日の日に道なき道を越えて1時間半かけて来てくれた人とか、SNSで発信したんですけど、SNSって…メールですね。メールを見てくれた人が7組くらい来てくれたんですね。私も被災者だし、みんな被災者。本当に涙流して、嬉しかったですね。だからやっぱり支えられたり支えたりしてもらって、居場所って本当に大事だかって、私も支えられました。

Table 1

災害情報を見直す
メディアを通して

Table 2

支援する側に立った時、自分たちは何ができたのか

Table 1 ような状況でもなかったら、混乱もしてたので。

災害情報を見直す
くメディアを通して

あともう一つ。それこそ2011年4月12日の新聞、震災1ヶ月の日の翌日、岩手日報の一面はですね、「水産の町、復興の灯」と、もちろん市場が再開しましたよっていうのをトップに持ってきてるんです。私はなんかこの頃多分ですね、現場に行っていて、瓦礫の中を、1ヶ月経った祈りの日なので、その中でも捜索が続いてますよっていう取材をしていて、トップは絶対こっちだろうと思いつつ絶対そうだよなって。でもなんでこんなこういう紙面になってるかっていうと、おそらくメッセージとして「がんばろう！岩手」宣言が出て、とにかく頑張っていきましょう、みたいなメッセージ性を発信したいということもあったと思うんです。この1ヶ月間、おそらく毎日毎日、紙面は悲しい紙面だったと思うんで。でも現場にいる方とすると、いやいやまだそんなこと言ってる場合じゃないで

Table 2 もう一つ、続けなきゃなかったのは、そんな中で『二番目産もうかな。』なんて思ってた利用者さんが長男連れて来たんだけど、『もうこんな状況じゃ産めない。』って言われちゃったんですよ。それ聞いた時に胸がぎゅーって締め付けられてね、諦めたくないって、『産まれたらばおらたちが何とか支えてけっから、おらたちが面倒みてけっから。』って言って、『もう震災なんかには負けたくないから。』っていうそんな気持ちで続けたいって思いました。それが本当に原動力ですね。そこで子育てしやすい地域をみんなで作っていききたいなって思いました。

支援する側
に立った時、
自分たちは
何ができたのか

江刺 ちょっといいですか？13年間言ったことがないんですけど、私、高田の中学校に被災した友人を確認するために行ったことがあって、その時に玄関に伊藤（昌子）さんがいたんです。そして伊藤さんとは知り合いだったので、『あ！伊藤さん！大丈夫だったの？』みたいなことから話して、『私、今2階の図書室におもちゃ並べて始めたんだ。』って言う話になった時に、私が『やあ伊藤さん、すごい！偉いよ、伊藤さん

しょっていうのはあってですね、やっぱり11日ってのは月命日なんだから、みんなお墓に行つて祈ってるし、遺体安置所に行つて行方不明の方を探してる光景がまだまだ残ってたと思うんです。

どんなメッセージを出すのかと、現場はどんな現状なのか、現場はこう思ってるけどやっぱりちょっと違うよね、全体を考えるとそうだよね、こっちの明るいニュースの方がいいよねっていうのは、現場の記者と紙面を決める人たちと意見交換をしながら決めていったと思う。違和感がある日もかなり多かったですね。

坂口 報道っていうのはある意味、情報を出すだけじゃなくて、今、斎藤さんも仰ってたメッセージ性、特に同じ岩手に生きる人間だからこそ一緒に頑張っていきたい、という想いが記事に出ていて、それが言葉の選び方であったり、映像の組み立てにも影響があるんじゃないのかは！』って言いました。ちょっと間をおいて伊藤さんが『もう一回言って。』って言ったんです。それで私、ハッと思ひまして、最初よりも力を込めて『伊藤さん、あなたは本当に素晴らしい！』ってもう一回言ったんですよ。そしてその後伊藤さんが『もっと言って。』って。なので、私はもう泣かないようにしながら何回もそれを言いました。そして『だよ？だよ？』って言うから『本当だよ、誰も出来ないのによくやってるよ。たくさんの人たちがこれで安心する場ができたって思うと思うよ。伊藤さんすごい！』って言って私、伊藤さんをぎゅーっとハグしたのを覚えてます。その後離れて私は一人で号泣しました。あなたの前で泣く訳にはいかない、と。あの時の伊藤さんは本当にギリギリの状態なんだけど、『やっている』というあの表情とか声とかが忘れられないですね。久しぶりに思い出しましたが、自分がしんどい時に、『いや、仲間の伊藤さんがあの時あんなに奮い立って頑張ってた。』っていうのを思い出して、自分も『よし、頑張ろう！』っていう風に力をいただきました。

などと思います。

一方で、取材を受ける側、特にその被災当事者という立場から受ける側、敬子さんに聞きたいと思います。実際、テレビが見られるようになったのが1ヶ月半以降、そこからテレビ、ラジオ、新聞、いろんな情報があふれるようになってきたわけじゃない？その中で、こういう情報って本当に今思えば改めて役に立ったのか、心の支えになる情報になったのか、今振り返り2011年頃、当時のメディアが出す情報に対して敬子さんはどんなものを求めて情報を得ようとしていたのか。こんな情報があったらもっと良かったっていう部分を聞かせてください。

岩間 正直なところをいうと、被災者って、ただ簡単に言うじゃないですか。でもその被災者ってどこまでなのかなってというのがすごいあったんですね。ていうのは、私は父親を亡くして、実家もないですけど、でも自宅は無事だから在

伊藤（昌） いやあ何か思い出しました。なんでかって言うと、スタッフ4人被災してるから散り散りバラバラに避難所に。私は実家に避難してたんだけど、結局活動は一人だけで長女が明日高校の入学式だっていうところで高田高校が被災しちゃったでしょ。それで高校の再開もいつになるか先の見えない状況で、家にいる長女やお友達にたまに手伝ってもらってとりあえず午前中だけやってたんです。それで桜が咲いたんだよね、その時。本当に一中の桜が見事で、こういう状況なんだけど、時間の流れは普通になって行って自然ってすごい、桜が咲くか？って、桜にも力をいただいたっていうのがあって。本当にその時心細かったんだよね。たぶんそうだったんだよね。午前中に一人でやってた時にいろんな支援者が来て、だいたいはいいい人なんだけど、もうNGOもNPOもわけわかんなくて取材に来て、何だったんだろうな、毎日…っていう感じでした。けど、居場所があるからやる事があったっていう感じでした、確かに。

葛巻 はい、ありがとうございます。じゃあ次は、



宅避難者ってなると、被災者って言われる人たちは家を無くした人たちが主で、家がある人たちは被災者じゃないみたいな感じで報道って区切ってしまうところがあるのかな。家を無くした人たちはばかりが全面的に出てしまってるのは、すごい自分的に悲しくて。被災地はみんな被災者だと思うんですよ。電気だってそうですし、ガスだってそうですし。普通の生活ができる環境になるまでみんなすごい大変だった。結局、そういった中で情報として入るのは避難所
今日のいわてボイスのチラシにも書いてある本題に近い話でもありますが、なかなか皆さん自身ではちょっと口幅たたくて言いづらいことかもしれないけど、皆さんのそういう想いがあって活動をしてくださったからこそ、変化したことってあると思います。地域の事だったり、もちろんその受益者の方だったり、もしくは一緒に活動してるスタッフだったり、ボランティアの方だったり。そういった変化についてご紹介していただければな、と思っております。早川さん、いかがでしょうか。

早川 みやっこベースを立ち上げたのは2013年で、震災からは2年弱ぐらいの時期でした。さっき言うのを忘れてしまったんですが、設立の経緯としましては、地元の高校生とボランティアセンターと一緒に活動していて、その子が言うには、その高校にはボランティアサークルがあって、毎週活動できるけど、他の学校の高校生は、そういうきっかけを持っていないっていう話があって、じゃあ他の学校の生徒を集めて、一回話し合いの場を持ってみようという事で、

Table 1

災害情報を見直す／メディアを通して

Table 2

支援する側に立った時、自分たちは何ができたのか

Table 1 に行かなければ在宅避難者は一切わからない。そういうのがすごい悲しかったし、大槌町は行政が機能するまですごい大変だったっていうのもあるので、遺体安置所なんかもどこが遺体安置所になってんだか、次はどこに移ったんだとか、情報がうまく伝わらなかったりというのがあった。私的には避難所の人たちだけじゃなくて在宅避難者ももうちょっとわかるような、家族を探している人たちは、もう一生懸命な時期だったので。

ただ、どこどこがこういうので再開に向けて頑張ってますよっていうのは、正直、私の気持ちの中では個人的にみんなこれだけ頑張ってたって、頑張らなきゃみたいな、応援みたいなのはありましたね。

坂口 今、応援っていう言葉を選んで言ったのかな？って思います。

岩間 そうです。

坂口 かなり選んで応援っていう言葉を言ってくれたのかなと思います。言葉を選ばずに言えば、どう表現しますか？

岩間 いや、こないだ地震、元旦に石川県の方でありましたけれども、よくこうインタビューをやっていて最後に「頑張ってください！」って言うじゃないですか。「家どうでしたか？」とか聞いた後に「頑張ってください！」って。いや頑張るって・・・頑張ってるんだよな、みんな。みんな気持ちが無になってるっていうか、感情も無くなってるとか、そういった状況で目の前の事を一つ一つこなしてるような状況に、「頑張ってください」って言われても、どう頑張ればいいのかかわかんない。何を頑張んの？いつまで頑張ればこれ解決できるの？みたいなのはっかりになってしまう。

Table 2 ワークショップ形式で、町に対しての考えや意見とかを、出すということをやってみました。そうしたらものすごいわーっと意見が出て来て、その2週間後にまた同じようなワークショップをやってほしいということで、口コミで広がって、友達や後輩が巻き込まれていったような感じで広まっていったというのが一番最初の経緯でした。

高校生としてはやっぱり震災後何か自分たちもできることはないかと思っていても、なかなか学校が忙しくなったりとか、具体的に何ができるかわかんないとか、窓口がわかんないっていう中で、そういう高校生向けの話し合いの場があったことで、何ができるのかを話せたし、それを共有できたし、そもそもそういう事を考えて活動すること自体がとても楽しかったという風に言ってくれてましたね。震災後のコーディネートって言いましたけども、そういう風に町が変わっていく、復興していくっていう段階で、高校生や若い世代が当事者として関わる機会を得て、その当事者意識を持ちつつ、内発的な動機として、楽しいからやるっていう

高校生が地域やまちづくりに関わるっていうのが自然になっていきました。同時に、そういう活動の発信も Facebook でやっていたので、地域の人が見てくれていて、高校生のボランティアに来てほしいっていう声もありましたし、やっぱり応援する声も増えていって、若者に期待するとか、若者に任せようと言ってくれる地域の人も増えていったのかな、という風に思います。それから10年経っているんで、当時高校生だった子たちが20代後半になって、今Uターンして来てくれている子も少しずつ増えています。今の高校生はもちろん震災を知るか知らないかぐらいの年齢ですし、震災をきっかけにやっているっていう感じじゃないですけど、高校生が、町の中で楽しく活動をするっていうのが浸透してきたっていうところは少し変わったかなとは思いますがね。

葛巻 当時の高校生の方が、今宮古に帰ってきて、みやっこベースでどういう関わり方をしていますか？

さっき言いましたけどね、応援の意味って、やっぱり「応援してます！」とかの方が反対に勇気づけられるなって、自分が。泣きたいんだけど泣けない自分があるって。気持ちでどう考えてるのかも、頭の中で自分が今どうしたいんだかわかんない状況の中、そういったところに「頑張ってください」って言われても、どうやればいいかわかんないのに、「頑張ってください」っていうより「応援してます」って言われた方が私的には、「あ、1人じゃないんだ」とか、自分の家族、親戚とか、そういう人たち以外の人たちが、これだけ応援してくれてるんだなっていう、自分の背中を押される一歩になるなって、いうのがすごいあります。

坂口 なるほど。ちょっとこれ英里さんに聞きたいなと思います。今、いろんな方からお話が出てきましたが、ある意味、報道の功罪の一つとして私が思うのは、ステレオタイプ的な描写

早川 はい、市役所で働きながらみやっこベースの理事になっていたり、あとはみやっこベースのスタッフになっている子もいます。あとは中学校のコーディネーターだったりとか、地域おこし協力隊で帰って来てる子もいたりですね。1人、2人と少しずつですけど、『みんないるから帰ろうかな』っていうのが少しずつ増えて来ているかなと思っています。ただやっぱり若者にとって魅力的な仕事が少ないのでそれがもう少し増えていけばいいなと思います。



があると思います。一方で、英里さんは東海新報でいろんな記事を書いている、実は今日集まっている方の中には英里さんの記事のファンだからって言ってわざわざ来てくださってる方も絶対いるんです。私もその1人なんです。

ここまでは2011年という発災の混沌とした状況の中を振り返った行動の話をしてきました。少しちょっと時間を進めて、変化していく報道の課題にも触れていきたいんですけど、その中で改めてここはちょっと確認しておきたい、

葛巻 そういう活動を早川さんがやってみて、実際、宮古の皆さん、特に若い経営者とか、そういう方々って何か変わりました？

早川 そうですね。やっぱり、若い経営者の背中を見たことで高校生たちは、こういう人たちが居るんだとか、こんな頑張ってる会社の人たちが居るんだとか、っていう感じのモデルになっているのが一つです。逆に経営者の皆さん自身は、そういう後輩がいるからいい姿を見せよう、みたいな感じで、それがエネルギーになっているかなっていうところもありますし、外にいても困ってる時があったら連絡してくれとか、直接的に雇用するとかそういう感じではないですけども、何か有機的な繋がりみたいなのが増えて、それがイベントをやる時の広がりにつながっているかなとは思っていますね。

葛巻 みやっこベースさんは、本当にそういう“機会”を作り続けてるっていうことですね。

早川 そうですね。波はありますが。はい。

Table 1

災害情報を見直すメデイアを通して

Table 2

支援する側に立った時、自分たちは何ができたのか

Table 1 皆さんと共有していきたいのは、やっぱり言葉の選び方。どう表現するのか。英里さんはその、例えば敬子さんが「応援してます」って言われた方が、そっと背中を押してくれてるっていう意味では心強いというお話がありました。取材する側が、どういう言葉で表現をするのか。またはマイクを向けた時に、どんな言葉を投げかけるのか。敬子さんは被災者、被災者っていう言葉がよくあるっていう話、あとは例えば「壊滅的です」、「ここは孤立集落です」って、よくある言葉で一括りにしちゃってるっていう部分は、本当の現場で起きている出来事を隠してしまう危険性が私はあったんじゃないかな、と。

災害情報を見直す
くメディアを通して

一方で、報道にはメッセージという情報の役割もあることを確認できた。そう考えると取材する側がいかに対象者に対してどういう言葉を選んで話を聞くのか、またはそれを記事にするのかってとっても重要なことだと思います。英里さんは言葉を取り扱うという中で、心がけて

Table 2 葛巻 はい、ありがとうございます。続いて、敬一さん。当時のことでも、今に繋がってるものでもいいですので、ご紹介いただきたいです。

支援する側
に立った時、
自分たちは
何ができたのか

阿部 2011年11月一般社団法人は法人化したんですけども、それ以前の8月ぐらいから実行委員会として活動し始めて、何ができるかっていうことをみんなで話をしていく中で、最初は仕事というか、取り組んだプロジェクトが某新聞社の新人研修として、実際被災者の話を聞く。それを『生きた証しプロジェクト』としてやっていくっていう提案をいただいて、そのコーディネイト役をやってくれないかっていうのが最初ですね。元々閉鎖的なところで外部の人に何かを語るとか、そういうのも苦手な人たちで、更に震災でもう身内を亡くして、そういう人たちに話を聞くっていうこと、外部から新聞記者の新人が来て、それを聞くっていうのはかなりリスクだなと思ってたんですけど、でも何かそこで変化を起こせるんじゃないかと思って、『やってみましょう。』と。で、スタッフで分担して、『この人にコーディネイトしよう。』とか

いることであったり、または失敗談でも構いません。何かちょっとその言葉という意味の辺り、お話聞かせてください。

鈴木 すごい難しい質問ですね。何て言うのかな、軽はずみに「頑張ってください」みたいな言葉を使わないようにしよう、「頑張ろう」っていう言葉がやっぱりその言われるのが嫌だっていう話はすごく聞いてたんですよ。だからそういう言葉は軽はずみに使わないようにしようっていう意識はありましたけど、私は自分が言葉を使うっていうよりは、やっぱりその相手の話を聞くっていうところにもものすごく注力してきたなど。要は、今ね、坂口さんが仰ったステレオタイプの報道になってしまう。さっき斎藤さんもね、幼稚園の話を・・・保育所？

斎藤 幼稚園です。

そういうのをやってスタートしたのが最初の活動だったんですね。初めてお金をいただいてやる仕事として。そのときに、せっかく数十人の新聞記者が来て1週間ぐらいそこに滞在して、そのための食事とか、いろんなものを全部こっちへ頼むって言うので、その時に郷土芸能を呼んで、『大槌の一つの文化です。』みたいな感じで紹介したりとか、そういういろんなコンテンツをいろいろ盛り込んで、その研修を作り上げたんですけども。やっぱり郷土芸能を外に見せるっていうことって、震災もあって、まあ祭りだっていうことで、祭りの時がーって盛り上がって、また来年ね、が郷土芸能のだいたい常なんですけども、郷土芸能を披露するっていうこと。まあ初めてかどうかわかんないですけども、やってみて、それが非常にインパクトがあって、それから何かどんどんどん郷土芸能の人たちに『やってくれないか』っていう依頼が増えてきたりとか、そんなきっかけもありましたし、そこに実は郷土芸能の人たちは、いろいろ初めはなんかこう、ちょっと変な顔してましたけど、やってみて、自分たちの誇れる文化が

鈴木 幼稚園の話をして、要はその、いわゆるお涙頂戴的な話、これは世間的には受けるって言われるような話になるぞって思われるような報道とかもあるわけですよ。被災地に心を寄せてくれる人がいるのであればそれはそれで必要かもしれないけど、でも当事者の意識とはかけ離れたものになってしまうわけですよ。この取材された保護者の方は、決してそういう形で知って欲しくはなかったはずなんです。そんなね、可哀想、可哀想っていう風に取り上げられて欲しくなかった。単に自分の亡くなった子供が本当は卒園するはずだった、その保育所の証書を受け取って、「ああ、あの子が生きてればな。」っていうそれだけの話なのに、それをなんかこう拡大解釈されるっていうのはすごく嫌だったと思うんですよ。

そういうなんていうか、物語仕立てにされるっていうのを、絶対取材される側は望んでないはずなの。こっちが意図した物語に沿って書くって外に発信できたということとか、そういうことで、本当に祭りの1週間から1ヶ月ぐらいでしか練習しない人たちが、年中練習して『いつでも披露できるよ』って、そういう体制が当たり前の状況になったという事だったりとか、おらがの活動以外にもあったと思うんです、ただ、それがもう新しい文化として少しできつつあるのかな、という気はしています。

あと、地元の人たちが自分たちで何かを生み出してみようとか、そういう発想ってやっぱりなかなか田舎出ないと『いや、無理だよ』っていう考え方が強い中で、フューチャーセッションっていうものを通して、自分が思ってる問いに対して、みんなでワークショップの中で作り上げてっていうのを、実はやってたんですけども、その中に僕よりも十ぐらい年上の女性ですかね。多分、田舎にずーっと居て、もう半分諦めて、『もうこんなもんだ』って思ってた女性が、『実は、私こんなことやってみたいんだけど。』って遠慮しがちに発したんですよ。多分、今までだったら思ってもそんなこと発しなかったと思うけど、その場がそうさせてくれて、『でもそ

ていうことをね。だから気をつけてるのは、私達も取材をお願いしてお話を聞きに行く時って、ある程度こういうことを書きたいなって想定していくわけです。こういう取材だからこの方だったらお話が聞けるんじゃないかなと思って行きます。けどそこで、やっぱりその方が話された内容が、自分の思ってたことと違う場合ってあります。「あ、違ってた。」って思う時は、その人の話を自分の物語に整えるんじゃなくて、枠の中に入れ込んじゃうんじゃなくて、企画そのものを変えるようにしてきました。もう、その人の話を、その言ったままの話をどう伝えられるだろうか、と。その方が言いたいことは何だろうかというこの方を大事にしてきた。本当にその人の言いたい核になる部分って何だろうなっていうのをうまく読み取るようにしてきました。

だから、岩間さんと多分もしお話ししてて、取材してて、やっぱりこの人は今「頑張っ」んなことできるわけないよね。』って思ってた女性が、周りの若い人たち、いろんな人たちが、『いや、それ面白いやん。』とか、『こうやったらできんじゃない？』とかいろんなアイデアをもらいながら、『もしかしらできるかもしれない』っていう心に変化して、そして『やってみよう』という。そういう自分の問いとか理念とか、そういう種を育てていく、そういう文化を元々作りたかったし、そういうのが少し閉鎖的な町に、そういうことができるかもしれないっていうぐらいのところの気持ちは生まれてきたんじゃないかなと思ってます。

葛巻 本当に、今のおらがさんに繋がる活動ですよ、研修受け入れとか。

阿部 そうですね。

葛巻 はい、じゃあ次は、伊藤さんお願いします。

伊藤（聡） たぶん自分の変化なんですけど、自分釜石に住んで、地域に希望を感じてるって

Table 1 て言われたくないだろうなって思ったら、やっぱりそういう言葉を記事にも使わない。「頑張っている復興食堂の女性がいます」みたいな言い方は絶対しなかったと思う。なんていうのかな、うん。読み手がどう取るかっていうよりは取材を受けてくださった方が読んだ時に、「私が言いたかったのはこういうことじゃないんだよな。」「私が思ってるのはこういうことじゃないんだよな。」って思われることが一番怖いなと思ってやっています。

災害情報を見直すくメディアを通して

坂口 工藤さん、気をつけてることとか、その言葉っていう部分ではいかがでしょう。もちろんカメラマンという立場ではあります。

工藤 そうですね、行った先で何回か言われたのが、“瓦礫”でしょうね。“瓦礫”っていうのが、「これ瓦礫じゃなくて財産だったからさ」っていう、それを何回か言われて。どうしてもそ



の・・・ね、説明するのに通りのいい言葉っていうのがあって。その言葉で処理するというのは、ニュースの方の原稿を書く人が決めることで、私は書くことはあまりないですけど、それを聞いてからというものです。その“瓦礫”っていうのを被災者の、取材対象者の前では私は使わないようにしました。何もね、そんなに意地になって、「いえ、うちではこれらを全てまるっと“瓦礫”と呼びますので」みたいな、そんな意地を張ることではない。嫌だっていうものは、

Table 2



いうところが変化したところかなと思います。一応自分も釜石市民なんで。希望を持ってるっていうところが、震災前後の変化としては一番大きいところかなと思ってます。

途中でもちろん話したんですけど、震災前から市民活動をやってて、当時20代で、そういう市民活動をやっていると市が主催するいろんな会議に呼ばれたりとか、なんちゃら委員とかになったりするんですけど、大体周りにはもう60代とか70代とかの重鎮がいる中で、20代の若者1人では何も話せません、みたいな状況だっ

支援する側に立った時、自分たちは何ができたのか

たんですよ。でも、なんかそういうのに出続けるのも自分の役割かなと思って一応出てはいたんですけど。要は、そういう自主的なまちづくりの会議とかって、やっぱりあんまり若者っていないんですよ。当時こういうところに希望を持っていたかっていうと全然持たなくて、もう閉塞感しか感じなくて。だんだん自分が成長していくとともに、この町はどんどん悪くなっていくんだろうなっていうことを思いながら過ごしていたっていうのが、震災の前です。

今はどっちかという希望を持っています。っていうのは、たぶん早川さんに近いんですけど、やっぱり直接的に高校生とか若い世代と関わっているというところがすごく大きくて。別に頼まれてないんですけどみんなボランティアに参加したりとか、なんならちゃんとまちづくりの会議に知らないところで参加してたりとか、そういう若者が結構いるんですよ。なんかそういうのを見ていたら希望しか感じないですよ。震災前にはなかったことでは、そういうところが一番大きい変化かなっていう風に思っています。

もう使わない。

あとはその映像の撮り方もミスリードするようなもの、要はその記事もですね、こういう取材ができるだろうなと思って現場に行って、っていう話をされましたけど、やっぱり映像も同じようなもので、きつとこういう内容だろうな、というのがあって行くわけですけど、想定しているものとは少し毛色が違ったっていうのであれば、柔軟に変えてしまわないと、多分取材受けた側からも、「こういう画を撮りたいんだな」「こういうシナリオでいきたいんだな」っていうのが、見え隠れするじゃないですか。誘導尋問のようにこの言葉を引き出したくて、こういう質問をしてるんだって言う質問の仕方とかは絶対しちゃいけないなって。その用意してきた原稿を完成させるための取材はしてはいけないと思っています。

坂口 藤堂さん、いかがでしょうか？

葛巻 若者が参加する機会を作っていた、増やしたことによって、今彼らがいろんな参加ができるようになったっていう、それが希望だということですね。

伊藤（聡） うん、そうですね。そこに若い世代でも参加していいんだ、みたいな。そういううまく空気感を出しているのは大切で、別に自分がっていうよりは地域側がそこを理解して、みんなサポートしてくれたりとか、同じ目線で話してくれるとか。実際に若い世代が参加してみたらそうなんですよね。同じ目線で話せるとか、っていうのもやっぱりすごい感じられるから、そういうのが心地よくて参加する、そして今度はその先輩の姿を見てまた後輩たちも同じように参加するっていうのがうまく続いていくのいいのかなって感じます。

葛巻 これから楽しみですね。

伊藤（聡） 続けていかなきゃいけないですね。

藤堂 はい。先ほどもデスクと喧嘩したって言いましたけど、今、逆の立場で自分がデスクをやっているんで、もう正直に言うと、こういう映像が撮れるかなという風な話を、取材に行く現場の記者に話をしてるのは事実です。ただ、我々いろんな方にインタビュー、よく“街録”っていう、街頭インタビューっていうのがあるんですけども、例えば消費税上がるのに対してどう思いますか、イエスかノーかで聞けるものっていうのはおそらくもうポンポンと話が進んでいくようなインタビューだと思うんですけど、例えばこの前の3月11日の震災12年を迎えた時のお墓でのインタビューなんていうのは、答えなんかないような取材ですので、もうそこは現場の記者に、「もうそこは時間かけていいから。その代わりしっかりと話を聞いて、どこがその人の伝えたかったところなのかっていうのをちゃんとじっくり聞く時間にしよう」って言って、うちなんかは毎年3月11日の、例えば朝

葛巻 はい。ありがとうございます。江刺さん、お願いします。

江刺 いやあ、『希望しかないでしょ。』っていう聡くんかっこいい～。釜石うらやましい～と思って。

伊藤（聡） いや、本当は落ち込むことがありますよ。概ね落ち込んでます。（笑）

江刺 大船渡に目を向けてみますと、あの震災の後の復興計画策定に係る説明会みたいなのがあちこちで頻繁に行われてた時にはですね、市民総出で、普通、公民館事業こんなに来ないだろうっていうような人数が集まって、真剣に声高に議論していましたね。それは多分、現状の生活の不満であるとか、先が見えない、どんな町になっていくのかわからない不安であるとか、自分の家や仕事はどうなるかっていうそういう不安とか、いろんなものがあって、みんな切羽詰まっていたもんだだったので、真剣に話し合っていました。一步も譲らないっていう感じでした。

Table 1

災害情報を見直す
メデイアを通して

Table 2

支援する側に立った時、自分たちは何ができたのか

Table 1 のお墓の取材っていうのは、本当に入社間もない記者に行かせるようにしています。いい経験になると思うので。なかには「やっぱり今日の使わないで」という風に言われて帰ってきた記者がいましたけれども、やっぱりそういう答えがない取材というのは絶対あるので、そこはしっかりと気をつけて、それは当時の経験もあるからなんですけれども。

災害情報を見直す
くメディアを通して

一方で、先ほどの“撮れ高”ってのがありますが、今年の3月11日に若い記者とやり取りをしたのが、「すいません。頑張ってみたんですけど、何も答えてくれませんでした」と言っていて、映像を見てみたんですよ。そしたら大槌のお墓に行って、お墓参りされている方が言葉を詰まらせて、言葉が出てこないんです。ご高齢の方だったんですけども、お墓をじっと見つめてるので、もう本当にだから言葉を発してないんですよ。発してないけど、それだけで伝わるというか。だからその若い記者には、「いやい

Table 2 た。例えば、防潮堤の高さを決めるにしても、『高い方がいい』、『低い方がいい』、『何メートルにする』ってものすごかったですね。そのぐらい皆が熱くなっていたところが見られます。必死でした。ただ、復興がどんどんなされていくと、特に目で見える、その防潮堤だったら防潮堤ができたとか、そういう目で見えて復興が確認できていくと、なんだろう… 聡くんは体温に置き換えたけど、だんだん体温が、熱が下がってくるというか、安心してきて社会のことよりも自分のこと、自分の家族のことに気持ちがいく。それが復興、正しい復興なのかもしれません。だからそれが悪いとは言いません。『地域のことは誰かがやってくれるだろう』、また『あそこの組織の人たちがやるだろうからいいんじゃない』、『まずこの若い人たちがやるからいいんじゃない』っていう風な感じで、社会を良くしようという人たちが少しずつ離れたか、少なくなったかという印象です。

支援する側
に立った時、
自分たちは
何ができたのか

ただ、大船渡市の意識調査を見ると、『何か役に立つために機会があればやりたい』っていうパーセンテージは高いんですね。6割、7割あ

や、これはもうそれだけで伝わる映像だから、きちんとそこは取材をしたあの人のためにこの映像は放送しようよ」という風な話で放送したんですけど。答えをこちらは引き出そうとするんですけども、それが、なかなか岩手の人って、言葉が上手じゃない方もいますので、表情とか仕草とか、そういうので表現するのが我々テレビの役目なのかなと思って日々やっています。

坂口 かなり時間が…あと15分ぐらいになってしまいました。本当に全然、まだまだかなり聞き足りないことがたくさんあるんですが、まとめに入る前に二つだけ、特に斎藤さん藤堂さんに聞きたいことがあります。

さっき斎藤さんから、会社なので異動があるという話。斎藤さんも陸前高田に腰を据えて駐在という形で取材をしてきたけど、2015年、2016年には離れざるを得なかったということがあります。実は今回、忙しい中、来てくださるんです。じゃあ実際ボランティア活動か何かをやっているかという、割合はぐっと低いんですね。そんな感じになってきた。震災の年に『俺は大船渡市民だけれども、体が弱くなって動くことができない。でも、あなたは体が動いてるだろう。何とかやってくれ。』って雪が降る中ですね、仮設のおじいちゃんが手を握ってですね、真剣にお話したことが忘れられません。だから私はぶっ倒れるまでやろうと思ってるんですけど、なかなかぶっ倒れないです。ただですね、あの時は40代だったんですけど、13年経って私はもう60代になってしまいました。あの時『何とかしなくちゃ』っていう、発災後の何年間の熱い気持ちの人たち、熱いまま残ってる人たちはみんな歳を取っていきます。ということで、若い人たちのやる気を起こすために…ってところで、小さい活動は出ているんですけども、これがなかなか継続が難しそうにも見えるのが大船渡の特徴になってしまっているな、と思っています。希望ある釜石のように希望を作れたらなあとは思っているところです。っていうのが市民の変化でしょうか。

ました。しかもその返信は多分なかなか来ないだろうなって想定してたら、即返信で「行きます」と、仲介してくださった方から連絡をいただきました。その理由が、「僕、高田大好きなんですよ」って。なかなか普段行けてないんだけど、「高田大好きだから、高田に何か還元できるんだったら僕は行きます」っていう風に即お返事をくださいました。組織という中で異動という状況を免れない中で、一方でその高田という思い入れのある場所に、時間が経過するなかで直接関わることは難しくもなる、でも、少し離れたことで見えてくる高田の状況であったり、改めて思う情報の取り方であったり、発信の仕方という部分もあると思います。離れたからこそ、改めて思う高田への率直な想いと共に、改めて振り返ると、災害の情報をどのように考えておられるか聞かせてください。

葛巻 あと、江刺さんのところでは、ボランティアで活動に参加してる方とかもたくさんいらっしゃると思うんですけど、そういった皆さんの変化とかはどうですか？

江刺 そういう方々が必ず一定数いるんですね。例えば、今やってるのがですね、新小学1年生に、入学式の時に花束を送ろうっていう事業をやっております。でもお金がありません、私達。なので花代、1人300円×190人の花代をですね、市民の募金でお願いしています。すると皆さん、『おらいにも近所に1年生いっから。』って何人か分を募金箱に入れてくれるっていう、そういう人たちがたくさんいらっしゃいますね。そしてこれを花束にする、190人分の花束を作ることを市民ボランティアにお願いするっていう企画もしています。そのバックアップを私達がしている。つまり市民の中では、相変わらず誰かのために役立とうとする人たちは一定数いる。この人たちのやる気を大きくして、『あれ、いい活動だから一緒に行くべし。』って次の人の手を引っ張って来れるように。『難しいボランティア

斎藤 難しい質問。さっきの、言葉の話を一つだけ僕も思い出したことがあったんで、ある寿司屋の大將にですね、昔取材をして言われたことがあって、お客さんからの手紙が励みになってる、と。私は何て書いたかっていうと「頑張ってるね」という言葉が励みになってる、と。で、新聞を持っていったら、「違うよ、頑張ってるじゃないよ。頑張ってるね、だよ。」って。だから違うんですね。「る」が一つ入ると入らないやつじゃ。言葉の一つ、そういうのも全然違うもんだなっていうのと、あと漁を再開する時に、定置網の取材に行くと、「震災で転覆したんですよ、前の船は」って言ったら、めちゃくちゃ怒られましたね。「そんな転覆なんて言葉は俺らの前と言うな！」と。すごいいい人なんですけど。言葉の選び方ってすごく不勉強で、だからこそ、間違っちゃったりするんですけどこの地域の人は温かくて、岩手日報の陸前高田支局って30年ぐらい経っていて、「歴代の支局長は皆さん知

でないっけよ。」って手引っ張って来れるような、そういう企画を立ち上げているのが現状です。市民のやる気を作っていくというのが、今後ますます必要だなと思ってました。

葛巻 はい、ありがとうございます。次は伊藤昌子さん、お願いします。

伊藤（昌） はい。そうですね。陸前高田市は中心地にいろんなものができてすごく生活しやすくなりました、コンパクトシティで、野活も綺



Table 1

Table 2

災害情報を見直すくメディアを通じて

支援する側に立った時、自分たちは何ができたのか

Table 1 てるよ」なんていう方も結構多いので、そういう繋がりから震災の時も取材を受けてくれたり。取材では、報道機関と住民という感覚じゃない、住民の中に入れさせてもらって、受け入れてくれて、やっていけたなっていうのもあった。

災害情報を見直す
くメディアを通して

あと、震災の直後ってみんながみんな大変で、報道することで課題が浮き彫りになるとか、そういう反響がすごく多かったし、その分こちらでも仕事をしている充実感もあった。逆に離れてからは、なんか自分だけ離れちゃったなと思って、ちょっとなかなか、まあ来てはいましたけど。ちょっとですね離れたことが多くて。なんか翌年ぐらい多分俺、甲子園かなんかの取材で3月11日大阪に居て、「俺何してんだろうな、この日にな」とか思いながら、で、何でしたっけ？

坂口 大丈夫です、大丈夫です。いやいや、ありがとうございます。あと、藤堂さんに是非聞きたい。藤堂さんは今、管理職という立場にあります。震災から13年経って、会社の中での

Table 2 麗になったし、本当に文化、スポーツ、芸術みたいな感じで、ものすごく素敵な街並みが出来上がりましたって言って、震災があっっているいろんな団体が立ち上がって、いろんな活動をしている。移住定住も県内の中では多い方だっていう風に言われてるんですよ。高田高校もあるので、高田高校生さんは意識もすごく高くて、いろんな団体を受け入れてすごく自主活動もあるし、うちにもすごくボランティアで手伝ってくれるし、『お弁当届けようプロジェクト』っていうのをうちも立ち上げたりとか、子ども支援ネットワーク会議っていうのはいろんな団体がいるし、なんかね、震災前より地域は元気だなっていうイメージがあるんですよ。それぞれ動ける人が動けることで、ちゃんと動いているっていうイメージは陸前高田市はあります。

支援する側に立った時、自分たちは何ができたのか

ただ、仰ったように仕事がないんですよ。すごく魅力的な感じの街に映ってるんだけど、いざ暮らすかってなるとなかなかそれが定住じゃなくて、いろんな制度があって、子育て支援もうちは唯一NPOなんだけど、保育所と併設している支援センターは3ヶ所あるし、療育はあるし、

異動もあって、取材をしたいけども取材できない立場にある。一方で、毎年毎年新しい子たちも入ってきます。その子たちは必ずしも震災のことを知っている、興味のある人たちではない。そういう意味でいくと、報道という現場の中にも、伝え手という担い手、震災をどう伝えていくかっていう担い手をいかにして育てていくかっていう役割も一つ、報道機関にはあると思っています。その辺り、心がけていること、課題があれば教えてください。

藤堂 はい。今うちの部署で当時を知っている人間は、私を含めても3人か4人ぐらいしかいないのが、正直現状でして、毎年そうですけど、いかにこの東日本大震災を伝えていくのかっていうのは、本当に日々悩んでいる。一方でたまたまこの前ですね、うちの会社説明会に私、出たんですけれども、大学3年生ですね、うちの会社に来たいという記者志望が結構来たんです

小中は給食費が無料だし、第2子から保育所は無料だし、移住定住するのに1年間、公営住宅は1万円ぐらいで住めるみたいで、すごいいろいろ暮らしやすいようになってる。うん、1万なんだって、最長1年間。だから希望はあるとは思うんだけど、何かがもうちょっと……。だけど諦めないでみんなで…あ、もう一つ言いたいの、私が江刺さんと同じ頃に始めたその子育てボランティア、やっぱり子連れだと『なんたら暇だれだ〜。』って。仕事もしないってやっぱり言われてたんですよ。でも、ずっとずっと私たちすごいきりりんきりんの活動していたら、『おめえたちすげえな。』ってそのおばあちゃんってくれたんですよ。やっぱり継続は力なりだなって今回すごい思ったし、私たちが活動してる中で、0歳児が中学校、高校で、お祭りに来てた子が、『きりりんの夏祭りすごく楽しかったので小学校の先生目指してるんですよ。』とか言ってくれるんですよ。で、職業体験に来てくれる。だからなんかすごくそれがね、希望を見出してます。

私も聡さんがおっしゃったように、いろんな



よ。なんでかな?と。そしてやっぱり能登半島地震を見て、東日本大震災と同じように、やっぱり「こういった災害とか、そういったことを伝えたいと思いました」と。おそらく半分くらいが、「本当にそう思ってるの?」っていう風に思ったんですけど、でも嬉しかったですね。

実はですね、この1月1日に能登半島で地震があって、うちの会社からも、3日?4日後ぐらいに応援に行きました。1週間・・・7日ぐらい会議とかに出させていただきまして、田舎なのでどうしても男子がそういう議員さんとかに分量が多いんだけど、発言する機会を与えられているっていいことだなんていう風に、なるべく喋るようにはしてるんですけど。一気に変えられないかもしれないけど、前向きに活動している人たちの力で、やっぱり変化してくるんだろうなと思います。震災があって、いろんな風が入ってくる、いろんな空気が入ってくるっていうのは良かったことだなんていう風に、ちょっと思ってるんですよ。

葛巻 はい、ありがとうございます。実は私、8つぐらい質問を用意したんですけども、分科会が15時5分までということでそろそろ・・・すみません。ただ、せっかくの機会なので終わる前に会場の皆さんから何か質問とか、これは言いたいということがもしあればお願いします。

今日の登壇者の皆さんからも希望あることを言っていたので、俺も明日から元気に活動ができるなと思っています。さて、最後の質問

取材をして、その時に手を挙げたのが、めんこいテレビと、福島テレビと、テレビ熊本。いわゆるその被災を経験した県で、先ほど言った、その応援を受けた方の恩返しとして、第1陣で行ったんですけども。やっぱり伝え続けることってというのは、自分の会社だけじゃできないのかなと思っています。全国の、いろんな人たちの力を借りながら、我々もその伝える使命をもって、めんこいテレビのヘルメットを被って、石川で取材をするとやっぱり声をかけてくれたそうです。まだまだ我々も頑張らなければいけないな、という風に思っています。

坂口 じゃあ工藤さんに。改めて思うあの混沌とした状況の中で、工藤さんにはカメラマンという立場でぜひお話しいただきたいんですが、その災害の情報を届けるという立場からして、改めて、これだけはもう一度自分自身に問いかけたい、問い直したい、ここだけは大事なな

は・・・、逆にモヤッとしてることを伺いたいなと思います。今日のいわてボイスのような取り組みをまたやっていきたいと思っていますので、次につながるようにある意味モヤッとした感じで終わりたいな、と思っています。先ほどは。できたことや皆さんの想いは共有したので、課題というか、こういうことがもっと良くなればいいなみたいなことを一つずつ言っていたら終わればなと思っています。では、早川さんからお願いします。

早川 はい。他の地域はどうかわかんないですけど、宮古市は面積も広くて人口が今4万7千人ぐらいで、人口で言えば沿岸だと多い方かなと思いますけど、いろいろ活動されている方々がいるんですけど、それが分断されているとか、何かうまく繋がっていないとか、それぞれ頑張ってるみたいに感じます。うちも多分そう思われてるところもあると思うんですが。なのでちょっともう少し連携してとか、協力してお互い応援し合ってるっていう風にやっているとよりいいんだろうな、と思っています。そ

Table 1

災害情報を見直すメデイアを通して

Table 2

支援する側に立った時、自分たちは何ができたのか

Table 1 て思っていることってというのがあれば教えてください。

災害情報を見直す
くメディアを通して

工藤 はい、転勤がなく地元で生き続けている、という前提があるので、気持ちを寄り添わせて、相手の気持ちを汲めるように、優しく問いかけて取材をするっていうのは、私は間違っていないと思っています、これから何度も顔を合わせていく可能性が何十年とあるわけなので、絶対その嫌な思いにさせない。私、すごい優しいカメラマンだと自分で思っていて、言葉も選んで、思いやりを持って取材をしています。震災後さらに強く思って、そのようにしています。なので、嫌がることを無理にしないでいいと思っているし、いいことは一緒になって喜んで、カメラ回しながら自分の声の方が大きくて「良かったね！おめでとう！」って言いながら撮ってみたいとか。本当に一緒になって感情も結構シンクロさせてカメラを回すみたいなことをこれからも忘

Table 2 ういう対話というか、お互いを尊重し合うみたいな、そういう文化を作っていく必要があるなというのは一つ感じております。

支援する側
に立った時、
自分たちは
何ができたのか

葛巻 ちなみに、何でうまく繋がってないんでしょうね？機会がないからですか？

早川 そうですね。機会がないのもあります。知り合い同士もたくさんいますし、その方々がやってることはわかってるつもりではあるんですけど、僕としてはですね。そうなんですけど、それぞれがそれぞれで頑張ってるからこそ、何て言うんですかね・・・弱みを見せられないのかもしれないです。なんか強みも弱みも話す機会がないんですよ。市役所と民間の壁もきっとあると思いますし、年代も多分あると思うし、活動分野だったり、団体間の分断というか、ある程度みんな頑張ってるからこそ、それぞれそれなりにやれてる部分もあって、連携しなきゃいけない、みたいな感じではないんですね、きっと。ただ、それじゃインパクトも弱いかなと思うんで、もっと対話をしながらお互いを尊

れないで、いい気にならずにですね、慣れすぎでしまわないように、取材のスタンス、取材対象者に寄り添うみたいな、かっこいい言葉で言えばですけど、そういった気持ちを忘れずにこれからもずっと続けて行きなさいよ、と自分に言い聞かせたいですね。

坂口 ちょっと斎藤さん、改めて聞きたい。取材する立場から考える災害情報って何だと思えますか？また、大切なことって何でしょう？



重しながらみんなで協力して、それぞれの分野で頑張っていくっていうのが必要かなと思っています。それに関連してなんですけど、宮古市はNPO法人の数が少ないので、存在感が薄いというか。他の地域と比べてっていうのはどうかかわかんないですけども、NPO支援センターみたいなものもないですし、NPO自体がちょっと軽視されてるように感じることがあります。存在感を出しつつ、両者の繋がりを持ちながら市民活動やNPO自体の必要性を市民や行政に発信していくってこともやっていかなきゃいけないのかなという風に考えています。

葛巻 はい。ありがとうございます。阿部さんお願いします。

阿部 言いたいことはいっぱいある。うちの団体は新しい仕事、やっぱりこれは作らなきゃいけないっていうミッションで立ち上がったんで。スタートしたのが、まだ被災した商店の人たちが何もできない状態のところに、町から事業費をいただいて商売を始めた。だからすごい『何

齋藤 やっぱりですね、災害取材の一番大事なことは、「命の尊さを教えていくこと」なんですよ、伝えていくこと。間違いなくこれで、2度と自然災害での犠牲者を出さないために、犠牲者を少なくするために何ができるか、何が必要なのか、世の中だったり、時代だったり、会社だったり、そういうことに流されることなく書くべきことを書くという耐力、っていうのは忍耐の耐ですけども、やっていくことが大事なんだなと。

私は震災当時、県庁の防災も担当してたので、非常になんかその2日前の3月9日の地震のときに、津波が来る可能性、もっと大きな地震が来る可能性が1週間以内にありませう、という専門家の話をもっと伝えていたら、とか。多分これ100年経つと東日本大震災も確実に昔の事になってしまっ、その時、「あぁ昔やっぱり携帯とかない、情報の発達しない時代だからあんなだけの人亡くなったんだよね。」って思っちゃう

と、また同じことが起きるので、そうじゃない、何かしっかりとしたものを伝えていくということが、大事なんじゃないかな、と。これは自分にいつも言い聞かせてるんですが、それをどう表現して何を行動していくかっていうのは、できてるわけじゃないんですけどもやっぱりそういうことかな、と。岩手県だけでも6千人ぐらい亡くなっていて、3県で2万人ですか。こんなに時代が発達してる時代になんでこんなに人が亡くなっちゃったの？って、常々、思いますよね。明治とか昭和って、だって携帯もないし、ましてや津波注意報なんかないわけですから。ていうことは岩手にいる新聞記者としてはやっていかなきゃなんないことだなと、今改めて思いました。

坂口 ありがとうございます。敬子さん、改めて聞きたいです。取材される側から思っていた、災害の時、大変な時の情報として、ぜひ実際現場に関わっている皆さんに向けて、「こういう情

でも、町民の理解がなかなか得られないっていうのがすごいモヤモヤしてます。

葛巻 はい、ありがとうございます。またあとでゆっくり聞きます(笑)。では、聡さんお願いします。

伊藤(聡) あれですよ、出る杭は打たれる系の話かなと思って、はい。ちょいちょい叩かれることはあると思うんですけど(笑)。葛巻さんもお存知の通り、2年半前にちょっとデカく叩かれちゃいまして、実は。全然自分たちは悪いことしてないんですけど、他で起きたことが、自分たちのことに置き換えられて、それがあたかも事実みたいな感じで流れて、実はそれで結構苦労してて。ようやく立ち直って今に至るみたいな感じなんです。実は今法人じゃないです、うち。任意団体ですけど、実はいろいろそういうのもあって一旦整理しようと思って法人を解散しました。いろいろ最近も活動してる途中で、またちょっと次はいろいろ技巧してはいますけど。そのまま本当にさんつな無くなるんじゃないか



でおめえたちが。』って、新参者が被災した事業者よりも先に商売始めたって。だからそういう部分でもすごく、直接は言われないうけどいろいろ言われたようです。やっぱりいろんな人と情報がいっぱい入ってくる場所だったんで、いろんな活動が行われるんです。そうすると『またおらがかい!』って、『何でもかんでもおらかに。』っていうことを当時から言われましたし、つい最近も。いや、しょうがないよね、受け入れとかはそこがベストだと思うから。そしてそれをちゃんとなして、と思うんですけど、

Table 1 報が欲しいので、ここにこだわってぜひ取材してください」という部分、ありますか。

災害情報を見直す
くメディアを通して

岩間 最初に自分がやったのは、家族を探すことだったので、避難所に関してもそうですけど、大槌で新聞っていうかメディアがなかったんで、家族を探す手段が欲しかったかなっていうところは自分ですごいあって。なので、先ほど言ったように遺体安置所もここからここに移りましたよ、とか、自分の町がどうなってるかっていうのもだけでも、やっぱり大切な家族といち早く会うこと、会えることが、自分的にそういった情報がまず欲しかったかなと思いましたね。

坂口 最後に英里さん、まとめてください。災害情報って、改めて、斎藤さんがまずその命の尊さっていうのを、社会とか世論とかに惑わされず、流されずに伝えていくっていう、ある意

Table 2 ぐらいの話がありました、葛巻さんとか何人かに助けられたということがありました。ちょっとしたことがあると、要は噂レベルの話で潰されかけたっていうのがあって。ただ、自分としてはそういう前例が残っちゃうと、これから何かやっていこうみたいな若者たちが同じことで潰されちゃう可能性があるじゃないですか。こういった話、ちょっと力持ってる人の好き嫌いで潰されちゃうっていうことになっちゃうから、それは前例として残しちゃ駄目だな、と思って、それでちょっと相談をして、団体はいま頑張ってきて、若干肯定しそうなところっていう感じ。だから変な話、例えば自分が何かJCに所属してるとか、要はそういうのも強いじゃないですか。組合だったりとか組織で強いとことかに入っていればまた変わったかもしれないですけど、やっぱり個人でもね、そういうことをしっかりやってる人たちが、ちゃんと適切に応援される、変な横槍が入らないようにちゃんとしないと、田舎で若者がもう生きていけないっていう事になっちゃうから、そこは何とかしなきゃなっていうモヤモヤとしてます。ちょっと

支援する側
に立った時、
自分たちは
何ができたのか



味肝の部分っていうか。何のために伝えていくのか、誰のために、今これ、なぜ伝える必要があるのかっていうところを、自己確認しながら取材するってことが大事と思っておられるのかな、という風に私は聞きました。

一方でその発災の時に混沌とした中で、いろんな情報が溢れてくる。それに対して敬子さんは、大切な家族がどうなっているのか、そこを知る、探せる、その手段という情報が欲しかった、という声もありました。英里さんは三陸に生き真面目な話になっちゃった（笑）

葛巻 はい、ありがとうございます。続いて江刺さんお願いします。

江刺 近い事実はうちの団体にも起こっています。『いやあ、この団体は目立つよな。』って声が聞こえてきていて。え？ダメなの？一生懸命やってるんだけど。そういう発言とかされてですね、もう青くなってます。団体としては2年続けて赤字なんですけど、運営を整え直しながら今年度も続けます。より良い地域のために純粋に頑張ってるだけなんですよ。お互い潰すっていうことなく、協力し合う、もしくは尊重し合うっていう関係性を地域に作っていくところを着実に進めていきたいです。子どもたちはちゃんと私たちに背中を見えていますから。大人がこのままじゃいけないんじゃないかなってちょっと思いました。

伊藤（昌） 同じく。うちも全員パートで人件費が最低賃金でやってもらっている。保育士

てきた1人であり、大切な場所が変化していく様子を見ざるを得なかったという立場の中で、いろんな想いがあったと思います。でも情報を取らなきゃいけない。改めて振り返って、その発災期、混沌とした情報におけるその災害の情報の、何でしょうね、あり方なのか、届け方なのか、ここだけは今後こだわっていきたく思われる部分、大切にしたいと思う部分はどうでしょう。

鈴木 たぶん今の坂口さんの質問からちょっと、というかだいぶずれると思うんですけど、お二人の話を受けてっていう感じでよろしいですか？斎藤さんがね、命の尊さを伝えることなんだ、と。2度とああいう災害で悲しい思いをする人がいないようにってお話をされて、私もその通りだなんてうなずいて聞きました。

地域にメディアがある意味っていうのは、ここに暮らす人たちがこの先も生きていくにあ
~~~~~  
を目指している方を、『きらりんさんで雇ってもらえませんか？』みたいな、雇いたいんですけどお金は払えないですっていう。やっぱりそこら辺の兼ね合いが、ボランティアでやってくださいみたいな目線で見られる、団体同士でも。何かそこがやっぱりちょっと。『子育てしやすいまちを作りたいんでしょ、あなたたち？ね？あと少子高齢化を改善したいんでしょ？』って。そう思うなら、もっと予算いただければもうめちゃくちゃアイデアあるし、動きたい人はそうやっていっぱい声かけていてくださるし、絶



たって、やっぱり忘れてはいけない、地元のメディアが伝えていかななくてはいけないということが、まず根底にあるわけですよ。私とか、工藤さんみたいに地元に住んでいる人間からすればなおさらそうです。自分たちの子孫に当たる人たちが幸せに暮らして欲しいってずっと思う。その取材する立場として、災害情報って何が大事かなって考えた時に、やっぱりこの間、能登半島地震があったように、今被災地でない場所を探す方が難しいわけですよ。そういった場所にもいきる情報の発信と、あとは情報の蓄積、教訓の構築っていうことがすごく大事になると思うんです。

結構人ってすぐ忘れるんですよ。本当にすぐ忘れちゃう。あれだけの震災を経験したにも関わらず、ここで取材してるこの人たちに話を聞いててさえ、もうやっぱり3年になろうかという頃にはですね、結構曖昧なところが出始めてました。なんだろうな。例えば語り部の方な  
~~~~~  
対楽しいことたくさんできるのになつていうことは、本当いつもモヤモヤしてます。本当にやるには人とお金・・・なくてもやってこれたからやれるんだけど、それじゃあバランスが取れないですよっていうところがモヤモヤしてます。

葛巻 はい。ありがとうございます。そこは私も花巻で活動している中でやっぱり同じく感じる所です。みんなの理解を促すという部分では、市民の政治参加みたいなことも多分必要なんじゃないかなと思っています。結局はね、そういった議員を選んでしまったのは我々市民ということだし。となるとそこにも運動とか、働きかけとか、何かしらのことをしていくってことを我々の世代、最初にうっかり始めた世代、の責任かなと思ったりしております。

はい、ということで終わりの時間になったので、再開はまた向こうの全体会で・・・と思いましたが、まだ向こう（分科会：テーブル1）が終わってないので、もう少し話したいと思います。

では、最後に登壇者の皆さんから一言ずつ、

Table 1

災害情報を見直す
メディアを通して

Table 2

支援する側に
立った時、
自分たちは
何ができたのか

Table 1 んかの話もですね、「あれ？前に言ってた話とちょっと違うよね」っていうこととかも出てくるんです。要は、何度もその取材をされて語る中で、人に話をしていく中で、より強い反応を求めて自分の中で結構記憶も改ざんしちゃったり、耳に心地いいように話も作り変えられて、それが何か正しい記憶になっていってしまうってこともあるんです。それは別に語り部に限らずです。取材を受けてくださる方もそうだし、私達自身もそうなんですよ。

災害情報を見直す
メディアを通して

だからかなり早い段階で、検証っていうのをしなきゃいけない、メディアは。いろんな方の、あの時何が起きてどのように行動したのかっていうことを、しっかり聞き取っておく役割っていうのが必要になるんだっていうのを、2013年ぐらいからもう感じ始めていました。だからそういう「検証と課題」っていうような企画をやったりして、陸前高田市は50人以上の消防団員が、民間の方が、殉職してしまったっていう

Table 2 今日のこの場の感想をいただいて、終わりたいと思います。早川さん、お願いします。

支援する側
に立った時、
自分たちは
何ができたのか

早川 はい、そうですね。会場の皆さんもありがとうございました。ちょうど昨日、一昨日と、気仙沼・石巻の視察に行っていて、今日は陸前高田で皆さんの話を聞いて、なんかすごい外の皆さんの頑張りに触れているというか、とてもエネルギーをもらっている感じがしています。まあモヤモヤの部分もね、ありますけども。こういう場に、宮古代表として呼んでいただいているので、またこういうところの気付きとかエネルギーを持ち帰って、しっかり宮古で頑張りたいな、と思わされた機会でした。ちょっと形が違うかもしれないですけど、さっきも言ったようにこういう対話の場みたいなことを地域で少しずつでも継続してやっていく必要があると思っていますので、そういう意味でも刺激になった会でした。皆さん本当にありがとうございました。

ような経緯もありましたので、そういう消防団員の方々に話を聞いて、水門の話もありましたけど、それを閉めに行き行って亡くなってる人が多いわけですね。だから、あの時彼らがどう行動して何によってそんなに亡くなってしまったのか、っていうことを聞き取って、書き遺して、もうそんなことはさせないぞっていう風に発信していかなくちゃいけないわけです。記憶が変容しないうちに聞き取っておくことが、すごく大事なんだな。それで、それをしっかり構築して後に遺していくっていうことをしていきたいな、と。だからその発災から数年の間にそれをしっかりやっておく必要がある、というのが一点です。

あとは、逆に時間がものすごく経過してからの話っていうのもあると思うんですね。災害情報っていうのは。それはつまり、あの時家族を亡くされたり、つらい思いをされた方々の心の傷っていうのは時間が経過しても、本当に癒え

阿部 復興に当たっていろんな会議がある中で、若者たちも意見はあるけどなかなかその場に居れないとか、言えない。その時に年寄りが『将来のことは後で若いもんにやらしてもらった方がいいんだから、今は俺たちの意見が重要』みたいな・・・そんなことを言い放った先輩がおりまして、もうその時カチンときましたけども。やっぱりそういう考え方のまちづくりをしてたら、本当に子どもたちの将来はその場になんぞと思ったんで、本当にそこ・・・うん、そうしなきゃいけない。身を削ってやってるボランティア、NPOの皆様、その存在は絶対必要だし、だからこそ、それを理解してもらえよう行政だったり議会だったり、そういうものに変えていかなくちゃいけないと思うので、直接、今はそういうボランティアの現場にも関わってはいないんですけども、違う側面から行動をして少しでも変えていくように活動していきたいです。ありがとうございました。

伊藤（聡） ありがとうございました。最初今日の会場に入ってきて、すごい懐かしい顔ぶれ

ないんだなっていうのを、やはり10年以上が経過して、すごく感じてるんですよ。本当に癒えることってないんだなって。表に出る回数が減るぐらいで、完全に消え去ることがない。

そして、そういう方たちが話をできるタイミングって人それぞれ違うんですよ。1年、2年で喋れる方もいれば、10年経っても無理って方もいる。12年経っても無理って方もいる。だけど、その方の話せるタイミングで話していただくことをまとめて、次の被災地になる可能性がある場所に届けていくことで、あなたはこういう思いをしないでくださいね、と伝えていくということも、一つの災害情報なんじゃないかと思えます。その聞いてほしいというタイミングでしっかり話を聞いて、震災から時間が経ったからもうそれは災害情報じゃないってことでなくって、それもやはり教訓の一つとして、伝えていく必要があるんじゃないかな、と。いつでもその話せるタイミングに駆けつけられる

で。みんな知り合いではあるんですけど、ここ数年全然お会いできてなかったのこういう場を作ってくれた連復さんに感謝しているというのが率直な感想かなと思えます。なんならみんなで傷をなめ合うって言うか、なんかすごいスッキリしたんですけど、モヤモヤを共有できてスッキリできました。あと、自分は今、能登半島地震の支援にも入っていて、ボランティアコーディネートを現地でやってるんですけど、被災地ではみんな前が見えなくて大変だっているのがあります。ここにいる皆さんも3.11で経験していると思うんですけど、まさにね、みんなそういう状況のど真ん中にあるんですよ、能登では。でもこっから先どうなっていくかっていうと、全く一緒ではないですけど、何となくわかるんです。だんだんこれからあっちが復興していく上で、こういう繋がり、それはこのメンバーだけじゃなくて、もっとこっちの岩手の全員が今度は協力できると思うんで、こういう繋がりを改めて持てたのが嬉しいです。能登のためじゃないですけど、我々の経験をしっかりと能登にも活かしていくっていうご恩返しにも繋がると

ように、私達はいつもスタンバイしてなきゃいけないんじゃないかな、ということを感じています。以上です。

坂口 バシッと締めていただきました。この後改めて、再度整理をする時間を設けたいと思いますので、ここで休憩をとりたいと思います。

思うので、改めて繋がりが大事だなっていうことを感じさせていただきました。本当にありがとうございます。

葛巻 ありがとうございます。はい、江刺さんお願いします。

江刺 はい、今日は5人の活動とか想いとか伺いましたけど、一人一人違いますものね。今日聞いてくださったたくさんの人からのお話も物語がたくさんあるだろうなと思ったので、こういう会が続いてですね、いろんな方々の想いを語り合う場、続けていってほしいなと思いました。今日はありがとうございました。

葛巻 ありがとうございました。最後は、伊藤さんお願いします。

伊藤（昌） はい、本当にこのような機会をいただけたことにまず感謝したいと思います。いろいろ考えすぎないようにして参りました。過去の経験を活かしながら、未来を見すぎずに、私

Table 1

災害情報を見直す
メデイアを通じて

Table 2

支援する側に
立った時、
自分たちは
何ができたのか

Table 1

災害情報を見直す／メディアを通して

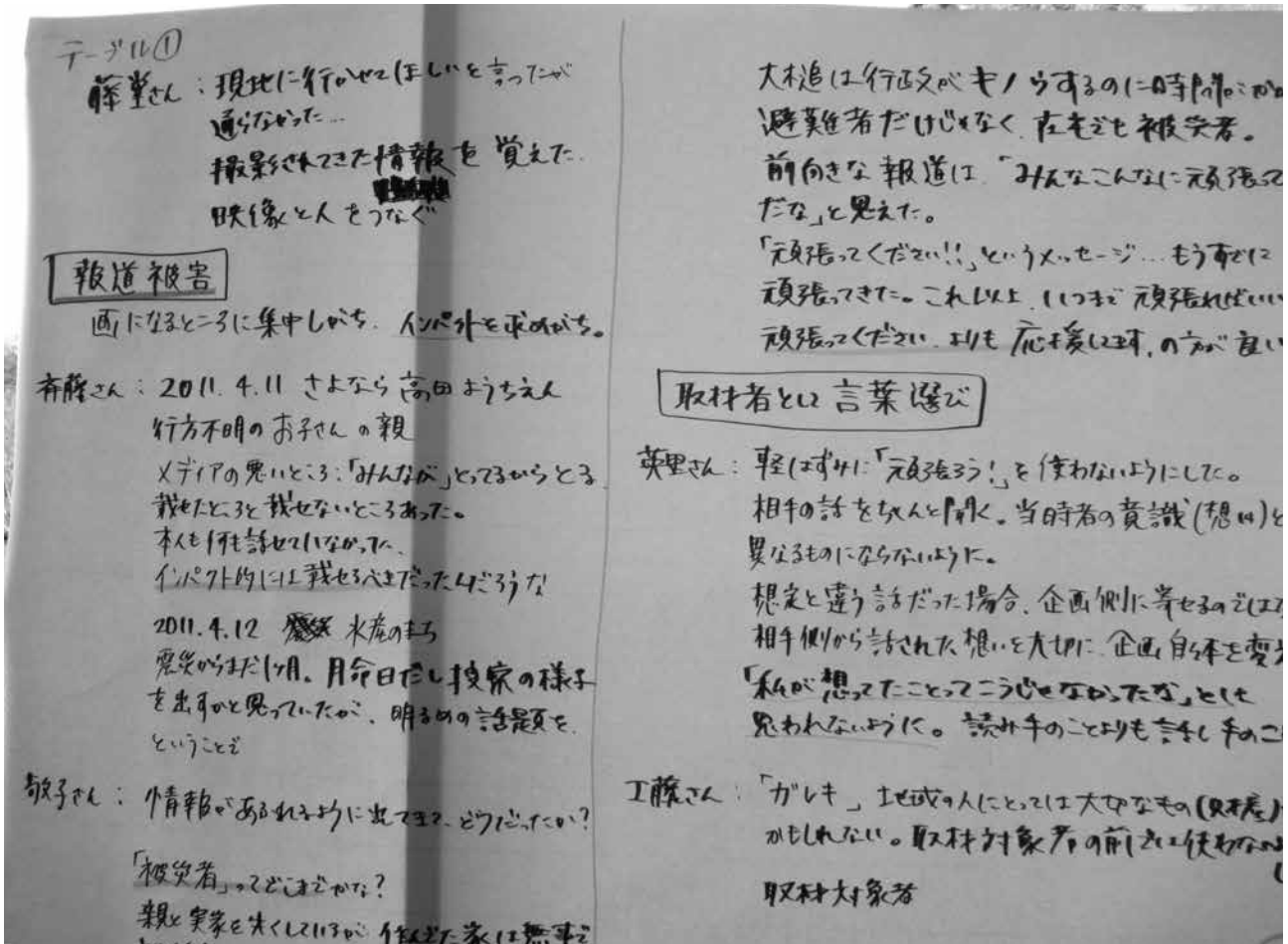


Table 2

支援する側に立った時、自分たちは何ができたのか

私たちはやっぱり目の前のことをコツコツやるしかないんだなっていうことを改めて思いましたし、私たち本当に子育てと同じように柔軟に対応するっていうのを心がけております。すごい、いろいろな目まぐるしい社会変化で、子育ても本当、日々変わってて。なので皆さんの活動を今日お聞きして、皆さんすごい頑張っておられるなって思いましたし、私も頑張らないとなつて、励まされました。この繋がりをまた大切に活動に活かして参りたいと思います。本日は皆様、聞いてくださってありがとうございました。

葛巻 はい。本日登壇して下さった皆様もお忙しいところ無理を言って参加していただきありがとうございました。敬一さんは遠く、埼玉から来ていただきありがとうございます。また、聞いて下さった会場の皆様も本当にありがとうございました。

登壇者の皆さんもいろいろな想いを持って、地域を何とかしたいと思って活動されていらっしゃる中で、なかなか難しいところ、ちょっとモヤモヤしているところも含め、本日お話を

いただきました。今後もそういった想いも含めて皆さんと共有・話し合いながら進めていければと思っておりますので、どうぞ引き続きよろしくお願いたします。それではこれでテーブル2を終了したいと思います。ありがとうございました。

各テーブルの議論を共有する場にて

坂口 長時間に渡りまして、本当に皆様お付き合いいただきましてありがとうございました。最後 30 分ぐらいになるんですが、最初に簡単一つ目のテーブル、二つ目のテーブルでどんな話が出たのか、というのを皆さんと共有します。その後、今日本当にいろんな方々がお集まりいただきました。是非、これは話したいというお声があれば、是非ご意見を伺わせていただければと思っています。

では、まず私の方からご報告させていただきます。テーブル 1 の方は「災害情報を見直す」と題しまして意見交換をしてきました。その記録に関しては、皆様向かって右側のところに、はい、今手を振ってくれているいわて連携復興センターの高田真理子さんが一生懸命書いてくださいました。後で皆さん、是非確認をしてください。

簡単にご報告します。大きくは、主に話は 2011 年 3 月 11 日からの混沌とした状況、大体 1 年間ぐらいを振り返って、その当時どうだったのか。今だから言えること、または失敗談なども含めてお話をいただきました。いくつかちょっと論点として取り上げたいと思うのが二つあります。まず一つは、どうしても報道っていうのは政治、行政と同じように槍玉に挙げられがちな媒体の一つです。私はそれは、それだけ社会に対して影響を与えることができる“情報”という武器を持っているからだと思っています。

一方では、それだけ情報を求める人たちがいるからこそ、そういう需要があるからだという風に私は思っています。そういう意味で、報道に携わる方たちというのは、社会に対する役割が求められている立場にある人たちだと考えています。

一方でどうしても報道被害という言葉が出て、“功罪”という風にも語られることがあります。その中で出てきた一つが、報道する人たち、特にテレビ局なんかで多いんですが、“撮れ高”とか“インパクト”。カメラでどうしても状況を抑えなければいけないという部分で、その“撮れ高”、“インパクト”を取らざるを得ないという状況に置かれたその中におけるその葛藤とか苦悩というのをお話しいただきました。

カメラマンの工藤さんからは、どうしてもその当時というのは。何を撮っても何を撮影してもニュースになるんだ、と。でも一方で、時間が経つにつれて、取材する立場として、もうこれ 1 回撮影したから、という理由で取捨選択をしてしまう。本来であれば、どう変化していったのか、というのを振り返るために、その記録がたとえ変わらなくても、撮影し続けるということも大切だったかもしれないけども、当時はその悲惨さという部分もあって、それを自分の中で選択して撮らなかったっていう部分もあった、というお話を聞かせていただきました。

あとはですね、もう一つはステレオタイプの描写、例えば、“瓦礫”、“孤立”とか、“被災者”、“被災地”という風な言葉がよく使われてしまいがちです。それに対して、大槌の住民という立場で今回お話をいただきました岩間敬子さんからは、そういう言葉が使われてしまうことで、ある意味境界線が生み出されてしまっている、と。いわゆる“被災した人”、“被災していない人”という。そういう区切られてしまうという部分が悲しい、という風な率直な思いも語ってくださいました。

そういったものを含めて改めて問う。その混沌とした状況における災害の情報って何なんだろう、改めて大事にすべき点は何なのか、という部分で振り返っていただきました。

岩手日報の斎藤さんが仰っていたのは、「命の尊さというのを、世の中や社会の状況に惑わされることなく、流されることなく、伝えていく、ということが大事だ。」というお話がありました。

東海新報の鈴木英里さんからは、地元のメディアだからこそ伝えていけること、伝えるべき役

割がある、という点。もう一つは、“情報”、“教訓”というのを蓄積していくこと。これが地元メディアが果たすべき役割である、と。なぜならばそこには、今後起こりうる災害に活かせるような情報と状況を作る、それが災害の情報に求められた役割ではないか、という風なお話がありました。

あとですね、岩手めんこいテレビの藤堂さんからお話いただいたのは、どうしてもその報道という立場、会社の中の組織の一員ということもあるので、人事異動で、自分は現場で取材をしたいんだけど管理職になってしまうとか、斎藤記者の場合は、陸前高田でもっと取材をしたいと思ってても他の部署に異動せざるを得ない状況になる。藤堂さんからは、管理職という立場から、震災から13年経って、震災に興味のない新入社員が入ってきて、震災の伝え手、取材の担い手作りという部分でのいろんな難しさであったり、ここを心がけている、という点などもお話しいただきました。

いろんなお話を聞いていて改めて私自身が感じたことをちょっと最後触れさせていただきませんが、災害情報って何なんだろう、という部分でいくと、私自身は魂が失われた情報に成り下がってしまうのか、そこと葛藤して、模索し続けている、その葛藤の中にある取材の現場に報道の記者の方たちがおられるという事実がある、というのは十分に確認された今日の一つのいわてボイスだったと思います。

その取材した情報をどういう風に、鈴木英里さんの言葉を借りれば、「教訓として蓄積していけるのか？今後活かせる情報になるのか？」。という部分で言えば、情報が、魂が失われた情報に成り下がらせないためにも、生き続ける情報を取材していく、そこにどういう言葉を選んで表現をしていくのか、ここにいかにして拘っていけるのかっていうのが報道の記者の方たちの、ある意味使命でもあるのかなと思いましたし、逆に言えば、取材をされる側にとっても、その情報というのが、いかにして生き続けていけるのか、それがひいては後世に伝えられる情報であったり、命を救う情報になっていくと思いま

す。

少し前に能登に行ってきました。一つとっても嬉しかったことがあるので報告させてください。ある小さな集落だったんですけれども、そこでは犠牲者が1名だけだったそうです。皆さん逃げて無事だった、と。なぜならば、東日本大震災であの悲惨な情報、映像を見た、情報を読んだ。それを踏まえて自分たちの地域も何かあった時に逃げなければいけないっていうことを確認しあったそうです。そのためにこの13年の中で、例えば自主防災組織を作った地域もありました。一方では、避難をするという活動を積み重ねてきた、だから犠牲者が少なかった、という地域もありました。確実に報道というのは、人の命を救うという大切な使命があること。そこに言葉という情報が乗せられていく、そこをどういう風に育てていくのかっていうのは改めて重要なことだなと思いました。

以上が私のテーブル1からの報告でした。ではテーブル2の方の報告、葛巻さんお願いします。

葛巻 はい。葛巻です。すいません、奈央さんほどどうまくまとめられる自信がないんですけども、テーブル2でございます。テーブル2は、「支援する側に立った時、自分たちは何ができたのか」ということで皆さんからお話を伺いました。

ここで言う“支援する側”というのは冒頭でも申し上げましたけれども、今日登壇して下さった皆さんも、誰かにやれとか、何か特別な教育を受けてやってるわけじゃなくて、自分たちの課題の中からアクションをとった元々は普通の市民、というところから活動をスタートしたということで話をさせていただきました。それが今後の人口減少社会における公共サービスの担い手みたいなことであったりですとか。あと、本当に今後起きてほしくないですけども、災害が起きた時にどうやっていくか、みたいなことにも繋がっていくだろう、ということで話を伺ったところでございます。

進め方としては何個か質問を用意させていた

だいて、それに皆さんにお答えいただくような形をとりました。最初、皆さん普通の市民だったのに何でこんな活動を始めたの？ということからお話を伺っております。

陸前高田の伊藤昌子さんからは、ご自身もお子さんを産んで育てる時に、子育ての不安というところで、先輩のお母さん方にいろいろ助けてもらった、と。そういった経験があったからこそ、次にお子さんを産む皆さんにやっぱりそういう思いをさせたくない、ということで、20年前に活動を始められた、ということです。あと、おらが大槌の初代代表の阿部敬一さんはですね、活動をもう2013年ぐらいですよ。引き継ぎをされて、今は関東の埼玉でお暮しなんですけども、今日は特別に来ていただきました。当時、敬一さんも元々ね、阪神大震災を大阪で経験されて、なかなかその頃は、自分も勤め人で阪神大震災の支援ができなかった、と。でもやっぱり月日が経つ中で、大槌にUターンされて、自分である程度の責任でもって動けるようなポジションにいたので活動できた、というお話もしていただきました。皆さん、いろんなストーリーがあって活動をスタートされてますけれども、そういった思いがある方というのは本当に貴重というか。例えばこれを行政とかからやってくれて言われてもやってくれる人が出てくるわけじゃないので、まずこういった皆さんの意思とか志というのはすごく大事だということも共有させていただいたところでございます。その中で実際にどんな変化があったのかということをお聞きさせていただきました。

まずは宮古で活動しているみやっこベースの早川さんのお話ですけれども、2013年ぐらいから活動されていて、宮古って大学とかがないので、宮古の中学生、高校生が宮古のことについて知る、今後何かしら宮古に関わるようなことがあってほしいということで活動をされています…。すみません、ざっくりお話していますが、そういった活動されてて、当時、そういったみやっこベースの活動に関わってくれた高校生たちが、1回地域を出て大学に入って卒業して、またいろんな形で宮古に帰ってきて、

今市役所に就職しながら、みやっこベースの理事をやったりですか、みやっこベースのスタッフにも帰って来てくださってるということです。みやっこベースさんが、彼らが高校生の頃に地域の若い経営者との繋がりを作ったりですか、宮古ってどういう街だろうということを知ることによって、そういった行動の変化が起きている、ということも話していただきました。釜石のさんつなの伊藤さんもですね、高校生のご支援をされていらっしゃいますけれども、やはりそういった機会を作ることによって、高校生が自分で考えたり自分でアクションしたりですか、そういったことが本当に目に見えて動いているということで、そこに希望があるよね、というお話をさせていただいたところでございます。

その中で、後半は、そういった良かったこととか希望の話があったので、皆さんのモヤモヤポイントも少しお伺いしました。その中でどうしても、私も含めてNPOの活動というものが、まだなかなか地域で浸透していない、ですとか、我々自身がちゃんとうまく伝えられていないということも挙げられました。例えば、議会だったり、首長の判断だったり、そういった部分で正当な判断をされない。あそこだけに仕事がいって何なんだ、みたいなことであったりですか、そういったこともやっぱり中にはあるので、団体同士の対話だったり、いろんな働きかけを市民の皆さんにもしていくということが我々にも必要だよ、というお話になりました。

あとコロナ禍以降ですね、今日ご一緒した5人の皆さんもコロナ前はちょこちょこ会う機会もあったんですけど、やっぱりコロナを経てなかなか岩手県内のNPO同士会う機会がなかったので、こういった機会自体があって良かったね、というお話もありました。

はい。まず、テーブル2の報告でございました。

坂口 ありがとうございます。こちらにテーブル2の記録がずらりと並んでいます。似顔絵がとっても素敵です。これきっとあの方だよっていうのはなんかわかる愛情のある似顔絵です。

是非皆さん見ていただきたいと思います。

では最後に、まだあと20分ぐらい時間があります。改めて、各テーブルの中で是非これちょっと一つ聞きたいです、ということでも構いません。今日、二つのテーブルを繋ぐ一つというのは、やっぱり“原点を確認する”という時間だったのかな、という風に思います。それぞれがやってきたこと、活動、その確認の作業だったのかな、という風に思いました。発災からってというのは本当にいろんな出来事があって、どうしてもそれぞれが整理しきれない部分ってというのがあったと思います。それがやっぱり時間の経過によって一つずつ客観的に、または整理されていく側面もあるのかなという風に思いました。是非こちらにお話を聞きたい、でも構いませんし、このテーブルのこのテーマについて聞いてみたいことがある、是非この意見を述べたいです、という方がおられれば、挙手いただきたいと思います。もしいらっしゃらなければこちらから指名をしていきたいと思います。どなたかいらっしゃいますでしょうか。いかがでしょう。

質問者1 テーブル1の方に行かせていただきました。貴重なお話ありがとうございました。報道機関の皆様にもちょっとお伺いしたいんですけども、東海新報さんの新聞を回していただいた時に、4月10日の新聞に結構広告が復活してたのが印象的で、私、3.11の発災時、広告代理店で営業してまして、非常に複雑な思いをしたんですね。それが何かというと、発災直後にクライアントさんから広告の差し替えの対応と、あとは、お悔やみ広告を出すってということで、そのお悔やみ広告を出すための枠の取り合いみたいな形で、もうずっと夜な夜な営業の局同士での、「うちのクライアントさんにここの枠を取らせるんだ。」みたいな、いわゆる協議が始まって、でも一方でテレビを見ると、皆様方が命がけで取材された様子が放送されていて、こんなことをやってる場合なのか？みたいなところにすごい複雑な思いをしました。当時、現地の報道機関の皆様が広告っていうものをどういう風に捉えられて、とは言え、メディアにとっての

ある種のいわゆる収入源でもあると思うんですけども、その辺のちょっと思っているものをお伺いしたいなというのが一つと、もう一個ごめんなさい、現在福島県の浪江町に住んでおりまして、当時の岩手の皆様から、原発事故っていうところはどういう風に見えていたのか、みたいなどころの二点をお伺いさせていただきたいです。よろしくお願いします。

坂口 ありがとうございます。じゃあまず一点目の方は、英里さんを中心に、斎藤さんと藤堂さんに聞くのがいいのかな、と思います。二点目の質問に関しては、テーブル1の5名、それぞれから見てどういう風に捉えてたか。敬子さんも報道の現場ではないけれども、大槌に住んでいた一住民として、福島状況をどう見てたのかって率直に聞かせてもらえればと思います。では英里さんからお願いします。

鈴木 すいません、ご質問をもう一回確認なんですけど、広告っていうものをどう捉えてたかっていうことでしたね？はい、実はですね、すごく好意的に捉えてました。というのは、要は、その当時入ってくる広告っていうのはほとんどが「どこそこで店を再開しました」とか、「ここでやっています」とかっていうような広告が多かったんですね。それって、それも情報なんですよ。私達が取材して歩く記事だけではなくて、それも地域の人にとってはすごく大事な情報だったので、そういう意味で広告っていうのはすごくありがたいものでした。もちろんですね、私達東日本大震災の津波で、ほとんどのクライアントの方を無くしてしまったわけです。要は、ほとんどの事業所が被災して、収入源がないわけですよ。もちろん新聞配達店さんも無くなって、購読者もいなくなってしまったので、購読料の収入もないわけです。購読料も広告代も収入がない、はっきり言って会社を続けていけるかどうかもわからない。なので私達、もう半年ぐらいは5万円ぐらいの給料でやってたんですよ。全然もう、「いや、この会社なくなるかもしれない」という状態で。そんな中でやっぱり、

購読者の方たち皆が被災されている中で、配れないから3月いっぱい無料にしたんですね、それでも。だって配れないから、無料で見てくださいと。お配りしてる中で、やはり広告主の方が戻ってきていただけるっていうのは、すごい前向きな、私達の会社にとってもですし、地域の方にとっても、「あの店どこそで今やってるんだ。」っていうすごくポジティブな情報になりましたので、そういう意味ではありがたいものだったな、という風に認識してます。

そもそも私達の新聞社はですね、チリ地震津波も経験してる就先ほど申し上げましたけども、そこで被災して、それまでは本当にもうあんまり名も通ってないような、地域紙とは言っても創刊もなかったの、ほとんど名前も知られてなかったんですね。だけどそのチリ地震津波があって、やはり同じように「再開しました」、「どこここに移転しました」という広告、あるいは「私達は無事です」というような広告をいただくことによって、地域の方たちに求められていくようになっていきました。なので、そういう情報を伝える手段としてもすごく大事に捉えています。何言ってるかわかりました？ごめんなさい、私もテンパってしまいましたが、大丈夫ですかね。そんな感じです。

齋藤 岩手日報の齋藤です。すいません、確かに言われて今見たら、確かにお見舞い広告とかがもう3月16日の新聞に載っているの、あ、そうだったんだな、と今気付くぐらいで。特に多分お見舞い広告が載っててどうだったかっていうのは、特に当時感じてなかったと思います。その後、広告のクライアントの方々も支援に入られて、いろんなプロジェクト、岩手日報もお花畑・・・ですね。花畑を被災地で作るプロジェクトとかいろんな本当に大手の会社の方々というプロジェクトが出てたので、こういう支援の仕方もあるんだな、と思いました。

あと原発事故についてはですね、3月15日辺りだったと思いますが、私も陸前高田の一中に取材していて、その時にいわゆる水素爆発が起きてですね、もう全員避難しなさいということ

が起きて、もう本当に当時はあれですよ、放射能のことについて不勉強すぎて、もうとにかく室内に逃げるんだっていうことで、何かもう、この世の終わりなんだな、と率直に思ったことは覚えてます、はい。だからやっぱり、私東京に行って取材しましたけども、ちょっとやっぱり東日本大震災の“津波被災地”と“原発被災地”って、二つに分かれるぐらいですね、ちょっと一つにはできない。東京はもうかなり原発災害のことが中心になってきますので、震災から6年とかもう10年ぐらいになるとですね。なので、こっちも同じ被災地だけども、やっぱりなかなかこっちから取材に行けることもないので、感覚というか、被災の度合いも違うので、ちょっと違うな、ということを感じてはいました。

藤堂 はい、めんこいテレビの藤堂です。先ほど自己紹介させていただいた時に、私、前職はまさにその広告というか、営業マンだったので、その経験を踏まえてお話をさせていただくと、皆さん多分覚えてると思いますけどあの当時、「ポポポボン」ってACのCM。あれは、本来であればそこにクライアントのコマーシャルが流れるはずだったものが、そこにそぐわないってことで差し替わってるCMがあれなんで、もうほぼあれでしたね。裏側を話すとですね、1ヶ月、2ヶ月ぐらいは、あれはクライアントさんが出してるお金で、そこを差し替えてるっていうので、我々の方にも収入が入るんですけども、それ以降は、我々はもうほぼガソリンがない状態で取材をしておりました。その「ポポポボン」のCMがちょっとずつやっぱり少なくなってきた時に、私はまず、経済が回るっていうことは、それだけ何か前に進んでるというようなイメージがあったので、すごく嬉しかったというか、もちろんその流れるコマーシャルは、「何とか何とか新発売」とかっていうCMじゃなくて、「頑張ろう」とか、「みんなで共に歩む」みたいな、そういうCMになったんですけども、そういう風ないろんな応援が、企業さんがバックアップしてくれてるっていうものを伝えるのも我々メディアの役割なので、すごくそこはですね。

あとやっぱり、今回の能登半島地震もそうですけれども、もちろんその被災した地方局というかはちょっとそこにそぐわないコマーシャルがあるんですけれども。例えば被災してない地域っていうのはやっぱり経済を回すっていうのを一つの被災地の応援というか、そういったもので、逆に言うと経済が回ってるところから我々は応援をもらって取材を続けていることができた、というのが広告についての私の話かなと思います。

あとは福島に関しては、私もですね、福島に2ヶ月くらい応援で取材に行きましたけども、やっぱり岩手とはまた違う課題を抱えていますので、本当にこれは、我々もいろんな知識とかそういったのも必要な取材になってくるので、常に勉強しながらやっていますけれども。本当に、岩手の人も同じ被災した立場として、例えば処理水の話とか、そういったのもですね、同じ立場として考えることが必要なんじゃないかなと、私は思っております。

工藤 はい、工藤です。私は広告のことはわからないので原発の方のお話だけさせていただきます。大きめの余震があって、ほどなくの爆発だったと記憶しています。大きな余震があったので、宮古港という大きな港を見下ろせる安全な高台で、カメラ取材をしていたところ、同じく余震の警戒に来ていた消防団の車がありまして、そこに入ってきた無線で爆発事故が起きた、というのがあって、とにかく家の中に入って、窓を閉めてっていうような指示がありました。分団の方から。それを放送して消防車は走り去っていったので、私も慌ててその高台から、実は自宅からですね、1キロぐらい坂を下ると、その港が見下ろせる安全な高台に行けるんですけど、そこを、もう坂を息切らしながら上がって。その間にですね、各家に爆発したそうだからっていうのも、あの時もそんなにテレビとかラジオとか使えてないところも多かった気もするので、「今聞いた情報なので、分団の人がこういう風に言ってるから、窓閉めて入ってください。」って言いながら家に帰りましたね。

ただ、あの事故っていうのが、私が子どもの頃の阪神淡路だったりとか、中越のような遠くで起きたことのような。やっぱり無知っていうのもあって、福島の原発事故の影響、何かしらの煙とか放射能が飛んでくるかもしれないっていうのも思いつつも、どこか我が身ではない、遠くで起こったことのような印象を持ったっていう記憶があります。だから、同じ三陸で起きてはいるけれども、東日本大震災とはやはりちょっと別の見方をしていた。身近には捉えてなかったです、と言ったところですね。はい。

岩間 私は福島のことに関してなんですけど、同じ被災地でも全然違うと思ってるんですね。あの原発の影響で正直言って、福島なのかっては思ってたんですけど。実際、大槌町でも山菜は駄目だったり、あとは原木しいたけなんかも影響があったりって、こんな離れた地域まで影響がすごいあるんだなっていうのがすごいあって。だからと言って、今、12年、13年経って関係ないのかって言ったら違うと思ってるんですね。でも、やっぱり正しい知識っていうか、それを自分が情報源として受け入れながらこの原発っていうのを考えていかなきゃいけないかなって。福島だけは別っていうわけでもないですし、正直、福島にも繋がってる人がいるので、いろんな情報を得たりとかって、自分なりにやってるつもりで生活しています。なので、福島だからとかじゃなくて、日本に原発がある以上、どこの地域もそういう影響があるんだっていうことを頭の隅に置きながら原発の知識っていうのを情報源として、知っていくべきなのかなって自分的には思っています。

坂口 では、テーブル2の方に改めて、またはテーブル1に参加された方で是非テーブル2の方にこれを聞いてみたい、という方がおられましたら是非挙手をお願いします。いかがでしょうか？または両方行き来していた方も見受けられました…はい。

質問者 2 今日はありがとうございました。テーブル 2 の方をずっと拝聴させていただいて、本当に、いわゆる被災をしながらも、どういう風に支援をしていったのか、皆さんの思いだったり原動力だったり、また、それによって地域がどう変わっていったかっていう。それまでの震災前にはなかった、若い人とかなかなか言い出せない人が次に向けて語り始めたりとか、希望を持つことができるようになったりって、本当にそれぞれ皆さんのある意味生き様を伺うことができて、本当に貴重な機会をいただいてありがたいという風に思いました。

さらに私の方でちょっと聞きたいなと思ったことが二点あります。一点目は、ある意味支援する側であり支援を受ける側でもあるってというのが今日のテーブル 2 の中でも出たんですが、やっぱりその中で大事にして行った方がいいことっていうのを、もう少し伺えれば。要は、今後いろんな被災地っていうか、災害が起きているわけですが、“受援力”というのも大事にされるっていうのが阪神淡路でも出たように思うんですが、ある意味、間に入られていて、大事にした方がいいことっていうのを、改めて振り返ってあれば伺いたいです。

もう一つ、本当にモヤモヤすることも含めて、いろんなお話を伺うことができたんですが、それらを踏まえてこれからの活動で、大事にしていきたいことだったり、挑戦していきたいことがあれば、ちょっとコメントいただければなと思いました。

葛巻 はい。ちょっと全員に聞きたいところですけども、“受援力”については昌子さんと江刺さんから是非。さっきのテーブル 2 の方でも、いろんな支援者の方がいらっしゃって、いい支援者の方もいらっしゃれば、ちょっとあれな方もいらっしゃるってこともあったので。やっぱりその支援を受ける上での心得とかを願いたいと思います。

伊藤 きらりんきつずの伊藤です。本当に普通の市民だったんですよ、私。だから NPO も

NGO もはっぱわかんなくて。一中（避難所）にたくさんの方が来て「支援します」って、大型の物資も届いたりとかね。結局、その支援を受けるとそれを配って歩かなくちゃいけないみたいなのがあったりとかですね。あと、（地域外支援者が）支援するために、私を含め被災した人達は先の見えない、自分たちの生活だけでいっぱい状態だったのであれしてこれしてって言われるのも正直、ちょっとつらい思い出があったりとかですね。何が良かったかっていうと、私達がこうしたいって思った時に寄り添ってくれる活動をしてくれた人がすごく関係が長く続いて、今も続いてるんですよ。やっぱりそれは現地の人の思いを汲むっていう思いやり、無理強いしない、それが長続きするコツかなって思うし、私達は地元で活動をして7ヶ月で流されたんですよ。大体の人たちはみんな復活してくださったんですよ。だけど、これでやめますって言った人もたくさんいて。私達がすごく頼りにしてた高田幼稚園っていうのがあったんですよ。復活するのかなと思ったら「やめます。」って言われたんですよ。子どもの居場所がまず一つ無くなったんです。私は、4月14日から一中の図書室で活動を始めたんですけど、あることだけでも地域の人を支えてあげたんだっていうのを、ずーっと後になってわかったんですよ。「きらりんさんがあってよかった。」っていうのは本当にね、あ～やってよかったなって思いました。それに、新しい NPO とかがすごく立ち上がったんですけど、やっぱり3年とか5年とか、10年で撤退や解散していくっていうことは、そこに根ざして地域の方々と連携して何か生まれてったのが撤退しちゃう。去っていかれる側の寂しさっていうのをちょっと聞いたことがあって。なので、地元の方が力を持って、継続して活動していくっていう意味はあるのかなっていうのは、ちょっと実感として感じております。

江刺 はい。地元の人たちに支援する立場でありながら、被災地にいるので、外部の人たちからは支援される側という。そういう微妙な体験

を続けているわけなんですけれども、“支援”っていう言葉の定義というか、イメージというかは、団体や組織によって、ずいぶん違うなっていう風に思っているところです。受益者のことをよくリサーチして、この人たちが安心して自立していくためには何が必要だろうっていう風に、頭が痛くなるまで考えて、そのことのためにやるっていう支援もあるだろうし、支援をしながら自分の団体が発信を外にできて、そして潤っていく。自分たちのために支援活動を他の人に行っているのかっていうような団体もありますよね。っていうところで、その人となりが出てくるのが“支援”という行為なのかもしれません。“支援”っていう言葉の意味合いがもう私の中ではなかなか難しくなってきたので、この頃は“支え合う”とかもっと平易な言葉で。もっと身近な言葉の“支援”っていうと、なんか住民さんにとってはすぐに“防災”とか何かそっちの方に行ってしまうので、そうじゃなくて、日頃からみんなで助け合って、支え合っていて、いい関係性を築くっていうところから、支援の心に繋がっていくんじゃないのかな。もしかしたら綺麗事を言ってるかもしれないんですけどね。支援をするということの難しさ、これはやればやるほど感じるところであります。何が正しい支援なのかっていうのは、能登も見て参りましたが、能登もそれからこちらの方でもその場所によっても、その地形によっても、人によっても、支援の仕方が違ったように、本当に支援者っていうのは、支援対象の人のことをよくよく考えながらやっていかなきゃいけないんじゃないかなっていう風に思いました。ちょっと答えになってるかどうか分かりませんが、すみません。

葛巻 はい、今のご質問にお答えをすると、外部支援者の方っていういろんな支援を持って入って来られますけども、やっぱり地域の方はよくわからない訳ですよ。だからそういう意味で、外部支援の方と、今日の登壇者の皆さんのような方と、一緒に何かしていくっていうことがすごく効果が高いのかなという風に思っております。

す。二つ目の質問何でしたか？

質問者 2 今日は色々振り返っていただいたので、これからの活動でどういうことを大事にしていきたいとか、挑戦していきたくていうのがもしあれば、と思っておりました。

葛巻 はい、じゃあ伊藤（聡）さんと早川さんをお願いします。まず伊藤（聡）さんから。

伊藤（聡） 釜石の伊藤です。さんつなっていう団体をやって、子どもたちが校外活動だったりとか、いわゆる社会教育に参画することで成長していくっていうようなことをやっています。大事にしたいことはそうですね、フレーズで言うと「自然体で接する」とか、「視線を合わせる」とかそういう類の話なんですけど、なんだろうな…。具体的に言った方がわかると思うんですけど、うちがサポートしてる高校生の団体で、釜石の高校生が防災とか震災伝承するグループ「夢団」という団体があって、その子たちは今5年目の活動です。最近メディアにもよく取り上げられてるんですけど、実は、すごくスペシャルな生徒ってあんまりいないんですよ。何を言いたいかっていうと、とにかく参画のハードルをひたすら下げるっていうことをすごい意識して伴走しています。ちょっと何かあったら「やってみよう」という子たちをとにかく拾うっていうことがすごく大事なんじゃないかな、と思っております。もちろんね、スペシャルな子ができたらそれはそれで嬉しいんですけど、それよりもその参画のハードルを下げれば下げるだけ、「じゃあ自分もやってみよう」みたいな。要はね、地域に関わる若者を増やすっていうことの方がすごい大事なんじゃないかな、と思っておりますので、大事にしたいことって言われたらそれかなと思うんですよ。だからこそ自分もなるべく、小学生とか中学生とか高校生も関わるんですけど、自分自体もハードルを下げることで「じゃあやってみようかな」というような人をどんどん生み出せるようなことに繋がるので、何かそこは意識しております。

葛巻 ありがとうございます。早川さんにマイクをお願いします。

早川 はい。みやっこベースの早川と申します。宮古市で活動しています。これから挑戦してみたいことですね？僕たちの団体は、宮古市の子ども、若者たちが幸せな人生を送れるようにということを目的として活動しています。2013年に立ち上げ、高校生が復興に関わる機会を作るところから始め、だんだん居場所を作ってみようとか、もっと小学生ぐらいから体験する機会を作っていこうとかに変わっていきました。あと、高校を卒業して社会人になっても1年以内に辞めてしまう子が多かったのが、新社会人の支援が必要だとか、経営者の意識改革も必要だとか。そういう風に子どもたち1人1人を見てると、この地域内で足りないものがまだまだたくさんあって、チャレンジすべき領域というかがたくさんあるなと思って、この10年間で活動を広げてきました。今は、子どもの豊かさ、幸せのために、やっぱり親御さんの支援も必要だな、と思っています。自分が親になったっていうタイミングでもあったんですけども。なので、そういう風にどんどんどんどん、まだまだやることはたくさんあるなとか、地域に足りない部分も多いのでやっていく必要もありますし。それを地域内の他の団体や行政とかと連携して作っていくというのもそうですし、外部の資源も活用しながらやっていかなきゃな、という風に思っています。その時に、さっきのテーブル2でも話したんですが、地域内の対話の場というか、お互いがどんなことを思って、どんなことをやりたいと思っていて、どんな力を持っていて、どんな弱みを持っていて、っていうことを話し合うとか、知る機会が多分少ないと思っているので、対話の場をこの宮古の中でどんどん作っていく必要があるんで、そこを調整していきたいな、という風に思っています。

坂口 ありがとうございます。いろいろご意見が出てきまして、改めてそのいわてボイスって、声を出し合う、今の早川さんが最後仰って、

その対話の場という言葉もありました。まだまだやっぱり全然やり尽くせてないんだな、というのを改めて感じさせられました。1年後に第2回ではなくて、近いうちにまた第2回という形で開催しながら、特に沿岸だけじゃなくて内陸の人たちにもどんどん伝えて、一緒に考えていかなきゃいけないと思っています。特に岩手にお住まいの方はわかると思いますけど、内陸と沿岸の、当時は片道2時間、大槌だと盛岡から2時間半かかる場所でした。支援する側、“支援”っていう言葉っていうのはちょっと良くないって先ほど指摘ありましたが。内陸に住んでいる者からすると、沿岸で活動して戻った時のすごいギャップに苛まれたっていうのを今いろんなお話を伺っていて改めて思い起こさせられました。その意味でも、今後は内陸でも、こういうボイスという形でもう一度、震災311の経験をどういう風に伝えていけるのか、もう一度それを問い直すことができるのか、内陸では今後、水害、あとは火山という部分でも、意識を育てていかなきゃいけないという部分もあります。その辺を是非、沿岸の方、内陸の方、ひいてはそれ以外の県の方たちと一緒に考える場を設定していきたいと思っています。その意味でも是非皆さん、何かコメントあればお寄せいただければ嬉しいです。以上をもちまして、ちょっと拙い司会でうまく時間配分できなくて申し訳ありませんでした。以上をもちまして第1回のいわてボイス、終了とさせていただきます。今後は是非お付き合いください。よろしくをお願いします。ありがとうございました。



東日本大震災 復興シンポジウム

第1回 いわてボイス～あの日から13年 今だから語れること～

発行 2024年9月30日

編者 岩手大学地域防災研究センター 特定非営利活動法人いわて連携復興センター

発行元 岩手大学地域防災研究センター